高岡市埋蔵文化財調査概報　第61冊

五十里沼田遺跡　調査概報

―― 平成15年度 能越自動車道の建設工事にともなう発掘調査 ――

2005年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報　第61冊

五十里沼田遺跡　調査概報

―― 平成15年度 能越自動車道の建設工事にともなう発掘調査 ――

２００５年３月

高岡市教育委員会

序

高岡市域におきましては、旧石器時代から近世までの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと考えられています。毎年、このうちのいずれかを発掘調査する機会に恵まれておりますが、調査を経て、当地に脈々と受け継がれてきた歴史が明らかになるにつれ、先人たちの尽力を誇りに思う次第です。

本書に報告しますのは、平成15年度に実施しました能越自動車道の建設工事にともなう五十里沼田遺跡の本発掘調査の成果です。今回の調査は、同遺跡にとっては初のそれでありましたが、古墳時代における全時期の土器群が出土するという、当地域としては貴重な成果を挙げることとなりました。

本書につきましては、当地の歴史を知る上でも重要な資料になるものと思われます。学術調査や郷土の歴史研究などにも、お役立ていただければ幸いに思う次第です。

末尾になりましたが、この調査にご協力いただきました、関係各位ならびに地元の皆様に、感謝申し上げます。

平成17年3月

高岡市教育委員会

教育長　　村井　和

例　言

1．本書は、高岡市五十里沼田遺跡における発掘調査の概要報告書である。

2．当発掘調査事業は、国土交通省北陸地方整備局富山河川道路工事事務所による能越自動車道の建設工事にともない、同事務所から委託を受けて高岡市教育委員会が実施したものである。

3．屋外調査は平成15年度に実施し、報告書の作成は平成16年度に行った。

4．調査関係者は次のとおりである。

課　長　：　大石茂

副主幹　：　本林弘吉

課　員　：　根津明義，荒井隆，太田浩司

5．現地調査及び本書の執筆は根津が担当した。

6．本書の作成にあたっては、次の方々から有益なご教示や資料の提示をいただいた。

久々忠義　新宅輝久　塚田一成　中田郁子　藤田慎一（五十音順・敬称略）

7．本書においては、下記の記号を用いて各遺構の種別をあらわした。

ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：その他の遺構

8．本書における各遺物番号は次のとおりである。

1001～須恵器　2001～土師器　3001～縄文土器

9．調査参加者は以下のとおりである。(50音順・敬称略)

屋外調査

石田敏行　太田健一　桶谷潤　河原康弘　小林央　佐野實　沢田和明

高嶋輝雄　滝律子　竹内喜三　中山賢冨　畠山行男　馬道弘一

山崎一男　山城一夫

室内整理調査

網英子　桶谷潤　小林央　滝律子　田中美穂子　西野まり子　南尚子

宮野美重子　村中理佳

目　次

第１章　　序　説 …… 1

第２章　　検出遺構

土坑 …… 3
畝状遺構 …… 5
溝状遺構 …… 6
溜池状遺構 …… 6
遺物集積遺構 …… 7

第３章　　出土遺物

古墳時代 …… 8
縄文時代 …… 8
古代 …… 8
遺物観察表 …… 19

第４章　　自然科学分析 …… 26

第５章　　結　章 …… 32

挿　図

図１．調査区位置図 …… 2
図２．五十里沼田遺跡（能越道地区）・調査区全体図 …… 4
図３．遺物実測図Ⅰ …… 9
図４．遺物実測図Ⅱ …… 10
図５．遺物実測図Ⅲ …… 11
図６．遺物実測図Ⅳ …… 12
図７．遺物実測図Ⅴ …… 13
図８．遺物実測図Ⅵ …… 14
図９．遺物実測図Ⅶ …… 15
図10．遺物実測図Ⅷ …… 16
図11．遺物実測図Ⅸ …… 17
図12．遺物実測図Ⅹ …… 18

写真図版

図版101．調査区全景
図版201．調査区全景
図版202．調査区全景
図版203．畝状遺構ＳＸ01
図版204．畝状遺構ＳＸ02
図版205．溜池状遺構ＳＺ01
図版206．溜池状遺構ＳＺ01
図版207．遺物集積遺構ＳＸ03・遺物出土状況
図版208．遺物集積遺構ＳＸ04・遺物出土状況
図版301．調査風景
図版401．遺物写真　土師器　壷・高杯
図版402．遺物写真　土師器　甕・壷
図版403．遺物写真　土師器　壷・小型丸底土器・鉢
図版404．遺物写真　土師器　鉢・高杯・甑・椀・ミニチュア土器
図版405．遺物写真　土師器　甕
図版406．遺物写真　土師器　甕
図版407．遺物写真　土師器　壷
図版408．遺物写真　須恵器　𤭯・杯身・蓋・杯・横瓶・大甕
図版409．遺物写真　土師器　杯・甕
図版410．遺物写真　縄文土器

序　　説

遺跡概観

「五十里沼田遺跡」は、高岡市域の北西にあたる同市五十里地内に所在する。地形的には西山丘陵と呼ばれる宝達山系の山並みにともなう谷部の一角に位置する。現状では後世の開墾や開発などによって宅地部や田畑が営まれているが、今回の調査により往時においては所々に緩急をもつ斜面が形成されていたことが勘案される。

この谷部には五十里沼田遺跡のほかは包蔵地の周知はないが、南方に所在する丘陵の尾根上には板屋谷内Ｂ古墳群や同Ｃ古墳群の所在することが確認されている。また、この尾根上の東側では前期古墳と位置づけられている板屋谷内Ａ－１古墳と、これをとりまく板屋谷内Ａ古墳群がある〔高岡市教委2000〕。これらの古墳群については近年に発掘調査が実施されており、その具体相をはかる資料も蓄積されつつある。ただし、周辺の平地に点在する諸遺跡の存続期間にも、今後の研究においては注目をしていく必要があると思われる。

なお、古墳時代のみならず、周辺には古代から中世にいたる様相も確認されている。また、古墳群の所在する丘陵の南側では、東大寺領須加荘の比定地のひとつである須田藤の木遺跡が所在する〔木倉1936・金田1998他〕。奈良時代の中頃に作成された同荘の開田図などを参照するに、荘域の周辺には「公田」がとりまく状況であったことが図示されているため、上記の比定案が正しければ、同遺跡周辺についても当該期及びそれ以前からの在地的な様相が並存していた可能性が浮上するかと思われる〔金田1998〕。

調査にいたる経緯

今回の調査は、当該地に能越自動車道の建設が計画されたことに端を発するものである。しかし、当該地はすでに五十里沼田遺跡の包蔵地として周知されていたことから、建設工事に際してはこの保護にかかる何らかの措置を講じる必要があった。そこで、事前に試掘調査を実施することにより今後の対応をはかることとなったが、建設予定地のうちの約945㎡の地については埋蔵文化財の所在することが確認され、関係各本面の協議を経て、本書の詳細を掲載する本発掘調査の着手へと進展していった次第である。

なお、当該建設事業にかかる発掘調査は、慣例的には富山県教育委員会及び富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が実施してきたが、同調査関連団体における当該年度の発掘調査面積が当初の予定よりも大幅に増大したため、富山県教育委員会から高岡市側へと五十里沼田遺跡にかかる発掘調査を担当する旨の応援要請がされ、これを受けるかたちで、高岡市教育委員会が同遺跡の本発掘調査を実施することとなった次第である。

第２章　検出遺構

今回の調査区は、周辺をながれる自然河川によって形成された谷地形の一角に所在する。周辺はゆるく傾斜する地形となっており、近現代に造営された田畑はこれを段状に整形して営まれている。当該調査区における古墳時代においても、溝状遺構ＳＤ01を境に北方及び東方へと傾斜してゆく地形であったことが判明している。現状の周辺地形を参照するに、おそらくはこのまま北方に位置する谷地形の最深部，すなわち上記の自然河川の付近にまでこの地形の傾斜は続くものとみられる。

地形上の分岐点となる溝状遺構ＳＤ01については一部なりとも自然発生した可能性も否めない。しかしながら、この起点となる溜池状遺構との接合部が同遺構の肩部にあたり、双方の間で貯水と排水のバランスがとれる状況となっていることや、地形的にこれらよりもやや高い地点に畝状遺構が存在することなどを総括するならば、これらについては概して人為的な手が加えられているものと考えたい。

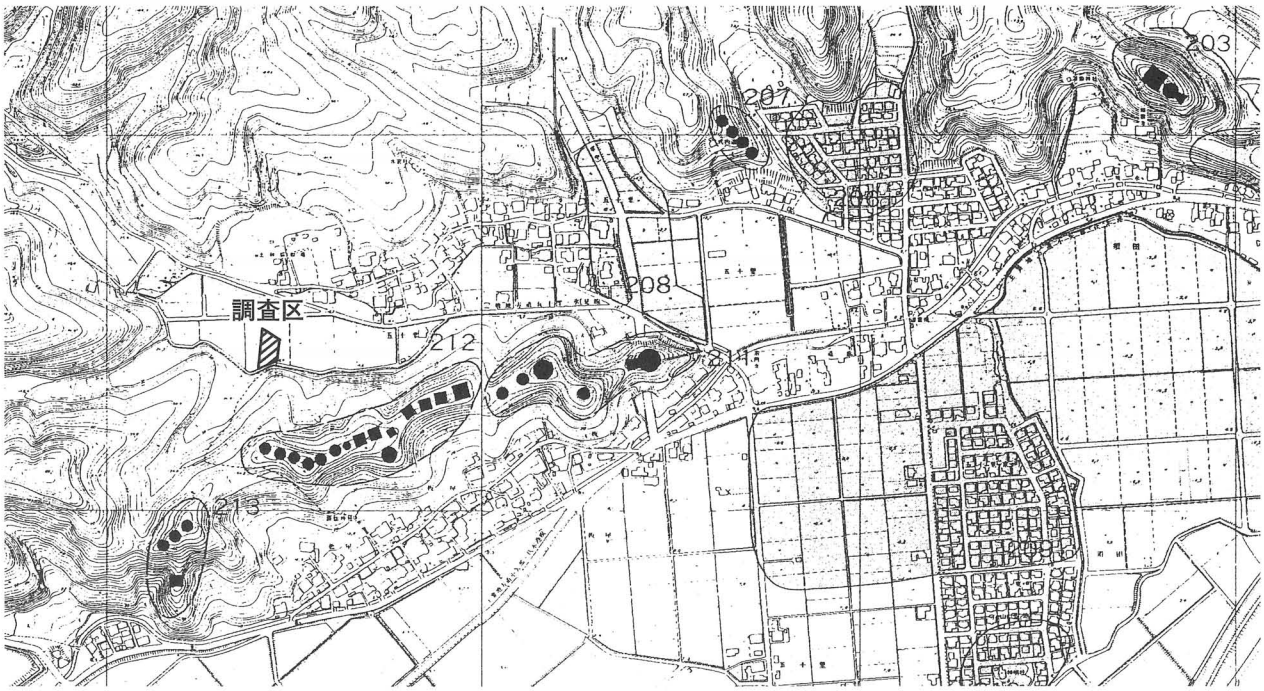


図１．調査区位置図（『高岡市都市計画基本図』及び『高岡市遺跡地図』2000より転載）

203　須田不動山古墳群　207　五十里道神社古墳群　208　五十里西遺跡　209　須田藤の木遺跡
210　百橋宮田遺跡　212　板屋谷内Ｂ古墳群　213　板屋谷内Ｃ古墳群

なお、今回の発掘調査では溜池状遺構の覆土を採集し、当時の植生や栽培種の特定を試みている。その内容については本書第４章を参照されたいが、調査の結果、食用となりうるヤマグワやマタタビ属のほか、食用及び繊維の利用の可能なカジノキ属などの種実遺体が検出されており、畝状遺構との関連なども考慮される。また、溜池の淵からはオニグルミの倒木も検出され、放射性炭素年代測定を試みている。

また、当該調査においては「地山」をもって遺構確認面としたが、傾斜地を整形し遺構を造営していることから遺構確認面も地点により土質が異なる。調査を行うに際しては、明らかに近現代の耕作土と認識できるものを「表土」とし、それと遺構確認面との間に存在する黒色土を「包含層」とした。ただし、包含層からの出土遺物は年代差があるため、すべてを下位に所在する遺構と結びつけて検討するには飛躍があると思われる。

土　坑

土坑ＳＫ01

調査区の中央やや北側の地点に位置する。北側にテラスを有しており、これを含めた全体の平面形状はやや不整の楕円形となる。テラスを含めた最大長は230cmをはかり、短径は最大で130cmを呈する。遺構の深さは確認面から最大32cmをはかる。覆土は全面的に黒褐色土を基本としながらも地山となる黄褐色砂質土を含有するものであり、周辺の遺構とも大きな変化はない。本址からは図３に掲載した遺物番号2001から2003などが出土している。比較的広い年代幅を有していることから後世の流れ込みが含まれる可能性があるかと思われる。

土坑ＳＫ02

調査区の中央やや北側の地点にあり、上述したＳＫ01の南に位置する不整形の土坑である。２基の土坑が重複したような形状を呈しているが土層観察のうえからは特に切り合いなどはみられなかった。

規格については長径210cm・短径110cm・深さは最深部で約34cmをはかる。覆土は全面的に黒褐色土を基本としながらも地山と同一の黄褐色砂質土を若干量含有するものであり、周辺の遺構とも概ね変化はない。本址については周辺に位置する畝状遺構とも切り合うが新旧関係は不鮮明である。とくに実測にたる遺物の出土はないが、古墳時代の土師器片が数点出土している。

土坑ＳＫ03

調査区中央からやや北西の地点に位置する土坑である。長径100cm・短径82cmの不整楕円形の平面形をもち、深さは最深部で約19cmをはかる。覆土は周辺の遺構と同様に、黒褐色土を基本としながらも地山と同一の黄褐色砂質土を斑状に含有するものである。畝状遺構等と切り合うが新旧関係は不鮮明であった。実測にたる遺物の出土はないが、古墳時代の土師器片が数点出土している。

土坑ＳＫ04

調査区の中央やや西側に位置する不整形の土坑である。周辺の遺構との切り合いにより全貌は把握し難いが、検出長約390cm・深さは最深部で約10cmをはかる。遺構の覆土は黒褐色土を基本としながらも地山となる黄褐色砂質土を若干量含むものである。土坑ＳＫ05や畝状遺構と平面的に重複するが新旧関係は不鮮明であった。図３に掲載した遺物番号2004から2007などが出土している。

土坑ＳＫ05

調査区の中央やや西側に位置する楕円形の土坑である。上記したＳＫ04や畝状遺構と切り合うが、新旧関係は不鮮明である。長径130cm・短径88cm・最深部深さ約13cmという規格を有する。遺構の覆土は黒褐色土を基本としながらも地山となる黄褐色砂質土を若干量含むものであり、周辺の遺構とも概ね変化はない。実測にたる遺物の出土はないが、古墳時代の土師器片が数点出土している。

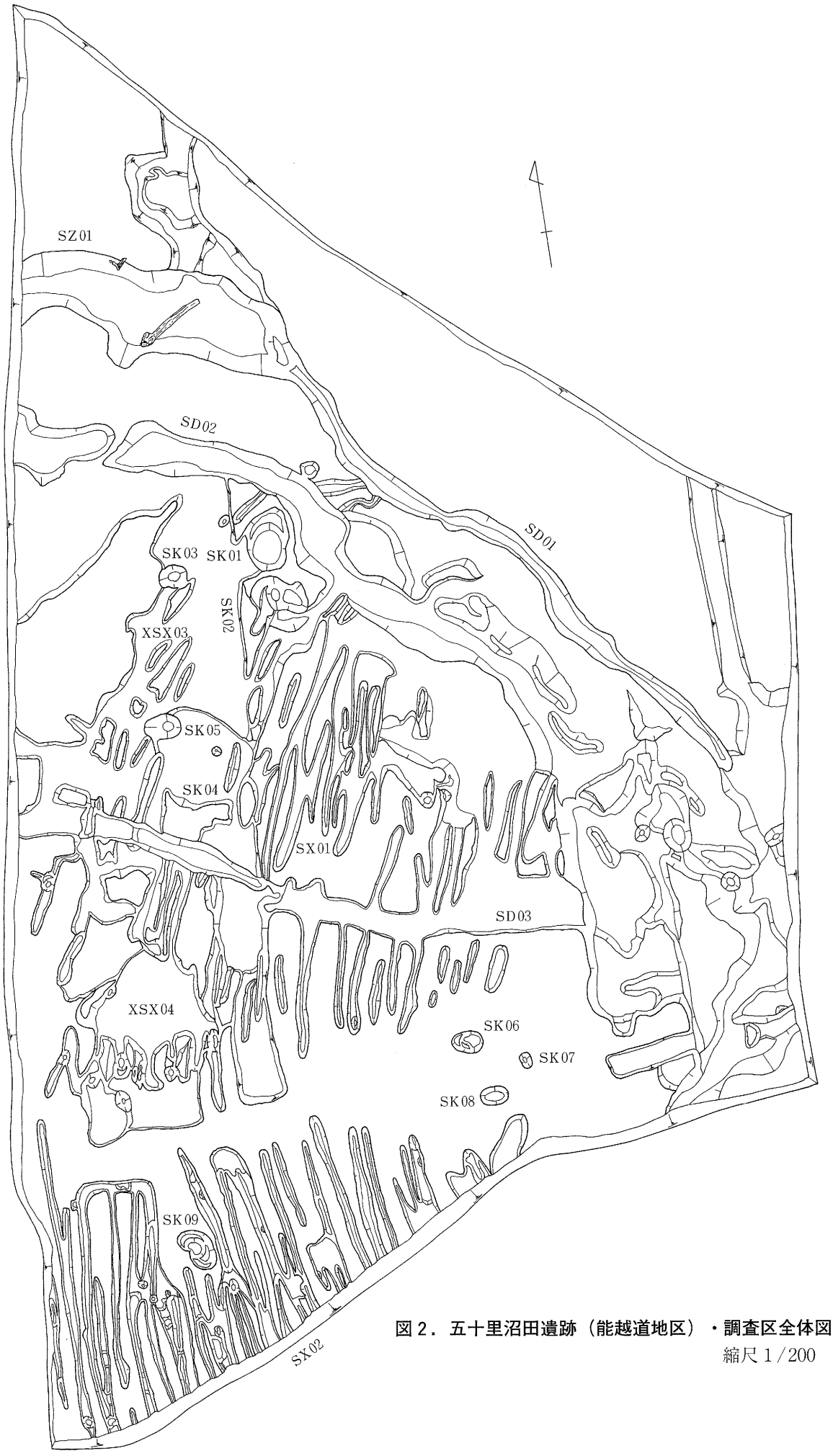


図２．五十里沼田遺跡（能越道地区）・調査区全体図
縮尺１/200

土坑ＳＫ06

調査区の南部に位置する土坑である。西側にテラスを有するものの全体的には楕円形の平面形をもつ。規格については長径121cm・短径73cm・深さ約22cmをはかる。覆土は黒褐色土を基本とする。実測にたる遺物の出土はないが、古墳時代の土師器片が数点出土している。

土坑ＳＫ07

調査区の南部に位置する長径52cm・短径39cm・深さ約９cmの楕円形の土坑である。覆土は周辺の土坑と同様に黒褐色土を基本とする。実測にたる遺物の出土はないが、古墳時代の土師器片が数点出土している。

土坑ＳＫ08

調査区の南部に位置する長径102cm・短径54cm・深さ８cmの規格を有する楕円形の土坑である。覆土は周辺の土坑と同様に黒褐色土を基本とする。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ09

調査区南端付近に畝状遺構群ＳＸ02中央部に位置する。南北方向にそれぞれテラスを有し、また遺構の平面形状も２基の土坑が重複したようなかたちを呈するが特に切り合いなどは確認されていない。

規格については長径168cm，短径86cm程度・深さ約28cmを有する。遺構の覆土は黒褐色土を基本とし、一部周辺の地山を混入させるものとなっており、概して周辺の遺構とも大きな変化はない。畝状遺構ＳＸ02と近接しているが新旧関係は不明である。とくに遺物は出土していない。

畝状遺構群

今回の調査区からは多くの畝状遺構が検出されている。これらについては、調査区の中央やや南側における空白地帯を境として南北に２つの単位に分けることが視覚のうえで可能と思われる。それぞれに切り合いが存在することから個々の溝が単発的に存続したものではないが、覆土が黒色土を呈するなどの悪条件が重なったため新旧関係までは把握することができなかった。また、両者が同時共存した可能性も多々ありうるかと思われるが、その場合、上記の空白地帯については現在でいう農道的な機能を有していた可能性もあるかと思われる。

なお、畝状遺構については、後述する溜池状遺構などと一体をなす可能性が高く、また自然化学分析により古墳時代末から古代に存続した可能性が浮上している。考古学的にも点的に出土した土師器にやや年代幅が見受けられることから流れ込みの可能性が問えるため、畝状遺構については古墳時代末から古代のものと考えたい。

以下では、畝状遺構群を上記の空白遅滞を境に、便宜的に南北に分割して記述をすすめていくこととする。

畝状遺構群ＳＸ01

上述した空白地帯の北側に位置する畝状遺構群である。便宜的にひとまとめにしたものの、実際には切り合い関係などもあったと考えられるなど、常時全域に畝状遺構が造営されていたか否かは検討の余地がある。

遺構そのものは比較的細めの溝状遺構が数本平行しているという態をなすものであるが、ほとんどのものが幅30cmから50cmのものであり、深さも15cmから25cmの範囲内でおさまり、断面形も概ねＵ字形でほぼ斉一性がみられる。覆土は黒褐色土を基本としながらも地山となる黄褐色砂質土を若干量含むことでほぼ共通している。所々で切り合いも見られるが新旧関係は不明確である。遺構内からは単発的に古墳時代の土師器が出土している。

畝状遺構群ＳＸ02

上述した空白地帯の南側に位置する畝状遺構群を総括的に命名するものである。上記と同様、実際には切り合い関係や時期ごとのひろがりなどがあったと考えられるが、土層観察のうえからは特に新旧関係が把握されなかったため、その推移などは不明である。本址を構成する各溝状遺構等の規格もとくに北側のものと大きな変化は

ないが、本址においてはやや覆土が異なり褐色土を基本としている。また、調査区南西隅には外側の溝が数本のそれを囲い、明らかに一つの単位を形成していたものと推定される一角がある。

溝状遺構

溝状遺構ＳＤ01

溜池状遺構ＳＺ01から発し、調査区の北西部から南東部へと蛇行する溝状遺構である。周辺の形状を鑑みるに、この南側に位置する溝状遺構ＳＤ02と同時共存し両者で一つの溝状遺構を形成していた時期もあろうと思われる。概して自然発生的なものであった可能性もあるが、溜池状遺構や畝状遺構の存在やそれらとの位置関係を考えるならば、何らかのかたちで先人の手による加工があったものと思われる。遺構の覆土は黒褐色粘質土を基本とするが、地点的に地山となる黄褐色砂質土が若干量含有し、あるいはこれらが斑状となる部分もある。

本址からは多量の遺物が出土しているが、その年代幅は古墳時代前期から中頃までとやや広域に及ぶ。また、後述する溜池状遺構と本址が一体をなすとみられることから、これらの遺物については後年における流れ込みの可能性が高いかと思われる。

溝状遺構ＳＤ02

調査区の北西部から南東部へと蛇行を呈してはしる溝状遺構である。上記したように本来的にはこの北側に位置する溝状遺構ＳＤ01と一体であった時期もあるかと思われる。周辺の環境を鑑みるに自然発生した可能性もあるが、畝状遺構の北端に位置することや、本址及びＳＤ01を境に地形が北方に下がる状況からは、何らかのかたちで先人の手により加工や維持などがなされた可能性があるものと思われる。

上述のＳＤ01と同様に、覆土は黒褐色粘質土を基本とするものの、地点的に地山となる黄褐色砂質土が若干量含有し、あるいはこれらが斑状となるところもある。本址からは多量の遺物が出土している。年代的には上述のＳＤ01と同様に古墳時代前期から中期のものが多い。

溝状遺構ＳＤ03

調査区中央からやや南部の地にあり、本調査区をほぼ東西に横断している溝状遺構である。遺構の覆土は黒褐色粘質土を基本とする。実測にはたらないものの古墳時代の土師器が出土している。

本址は溝状遺構ＳＤ01及び02と合流し、且つ畝状遺構ＳＸ01とも切り合うが、新旧関係は不明である。ただし、ＳＸ01を構成する溝状遺構のなかには、明らかに本址と平面的に重複するものがあるため、全ての時期に両者が同時共存したわけではないことは判明している。

溜池状遺構

溜池状遺構ＳＺ01

上記の溝状遺構ＳＤ01と連結する遺構である。視覚及び形状的には溝状遺構と遜色はないが、遺構の性格を考え標記のような名称を付した次第である。遺構の西側が調査区外へと達しているため全貌は不明であるが、確認長9.2m・幅２～３m程度・最深部の深さ約86cmの規格を有し、また断面形は概ねＵ字形を呈している。

溝状遺構ＳＤ01とは本址東端部分の肩部で連結しており、本址の水位が両遺構の連結部分に達したところで蓄積された水が溝状遺構へと流出する仕組みになっていたと考えられる。また、本址からは図２及び図版206にもあるように倒木が検出されている。本址の一角にはやや突出した部分もみられるが、状況的にみてこの倒木の風倒痕と思われる。

遺構の覆土は概ね４層に大別される。最上層は暗褐色土層であり、第２層は植物遺体や炭化物などを多く含む上層よりもやや黒褐色にちかい色調を呈する泥炭層である。第３層は灰褐色砂質土をベースとしながらも径１～２㎜程度の小石や地山と同一の青灰色砂質土を若干量含有する土層であり、この土層からも植物遺体が若干量混入する。第４層は第３層とほぼ同質の土層を呈するが、植物遺体等の混入はない。

なお、本址遺構確認面の直上層からは６世紀代の須恵器の杯身（図11－1001）が出土しているが、この遺物については同層に流れ込みにより混入したものと思われるため、溜池状遺構の埋没年代を直接示す保障はない。ちなみに、次章で紹介をするように自然科学分析を行ない本址中層の内容を検討したが、同層については７世紀中頃から８世紀後半代にかけて堆積した可能性が報告されている。同層の内容から勘案するに、長い年月を要して堆積した可能性があるとみられるため、大局的には当遺跡における古墳時代末から古代という、比較的新しい時期に溜池状遺構を含む遺構群が存続していたものと考えたい。

遺物集積遺構

遺物集積遺構ＳＸ03

調査区の西側において遺物が集中的に検出されたエリアを遺構扱いして報告するものである。したがって、遺物包含層中からの出土遺物群をさすものであるため、とくに土坑などを伴うことはない。

本址からは図４及び５までに掲載した遺物番号2013から2036が出土している。大局的には古墳時代前期のなかでも比較的新しい時期の土器が出しているかと思われる。

遺物集積遺構ＳＸ04

調査区の南西部において検出された遺物集積遺構である。上述のＳＸ03と同様に特に土坑などを伴うものではないが、遺物の出土状況の特異性を重視して遺構扱いするものである。

本址からは図５に掲載した遺物番号2037から2043などが出土している。古墳時代中頃のものが比較的多く出土しているが、詳細については次章に譲ることとしたい。

第３章　出土遺物

今回の調査区からは多量の遺物が出土している。このうち圧倒数を占めるのは古墳時代の土師器であるが、そのほかにも、若干数ではあるものの古代の遺物も出土している。冒頭でも述べたように、古墳時代の土師器については同時代の前期から後期までの全時期の遺物が出土しており、将来的には当地域における編年研究の一助となっていく可能性があると思われる。

実測を行なった遺物のうち、遺構内からの出土は延べ164個体をかぞえ、包含層から出土したものは延べ137個体にのぼる。遺構内から出土したもののうち圧倒数をしめるのは溝状遺構ＳＤ01であり、延べ97個体をかぞえる。ついで延べ41個体を出土した遺物集積遺構ＳＸ03、延べ11個体を出土した遺物集積遺構ＳＸ04、延べ５点を出土したＳＫ04と続く。上記以外のその他の遺構については、畝状遺構の一角から１点のみ出土があったケースが８例あるほかは、実測にいたった遺物を出土した遺構は皆無である。ちなみに、包含層から出土した遺物の分布状況を鑑みても同様の傾向を呈しているが、概して当調査区の出土遺物は、地形の下降する北方ないし東方にむかうにしたがい出土量を増す傾向にある。

なお、出土遺物の実測図については図３から12までに掲載したが、遺構内出土のものについてはその旨を併記することとした。また、復元が儘ならず、写真図版には部分的な掲載にとどまったものなどがある。

古墳時代

土師器

概して古墳時代の前期から後期にいたるものが出土しており、今回の調査区から出土した遺物の全出土量のうち圧倒数を占める。地点別の出土量としてはＳＤ01と遺物包含層からの出土がほとんどである。

現状では細片が多いほか、接合も儘ままならないほど軟弱な遺存状態であったため、詳細を把握するのは困難であるが、図10に掲載した包含層出土の2105などが当遺跡の中では最も古いグループとして位置づけられようかと思われる。そしてこれ以降の時期においては出土量の相違はあっても概ね古墳時代後期までの出土遺物が見受けられる。ただし、各遺構の年代を鑑みるに、多くは後世の流れ込みの可能性が高いと思われる。

なお、現状では富山県内における古墳時代の土器編年は必ずしも確立をみていないものと思われる。また、現状では古墳時代の前期頃を中心とした詳細な研究成果は提起されているものの、それ以降の時期については資料の数量的限界から必ずしも明確なものとはなっていない。そうした意味では、本遺跡からの出土遺物は土器編年を補充する資料としての期待が高まるところであるが、その点については別稿で検討をすることとしたい。

須恵器

当遺跡からは古墳時代に属する須恵器が２点ほど出土している。一つは図11に掲載した遺物番号1001の杯身であり、ＭＴ85相当とみられる。この遺物については、溜池状遺構の直上に位置する包含層中から検出されたものであるが、概して流れ込みによるものと思われる。細片であるため詳細が不明なところもあるが、底部のうちの多くの部分はヘラケズリによる調整がなされているものとみられる。

もう一点は図11の1002としたＴＫ216相当とみられる小型甕の頸部付近である。上方にむけて外反したのちに断面三角形状の突帯をめぐらせ口縁部と画されているものと思われる。頸部には一条の篦書き波状文が施されている。調査区の中央からやや南方に位置する地点の包含層中より出土した。

縄文時代

当遺跡からは計６点の縄文土器が各地点の包含層中より出土している。上山田・天神山式から縄文後期ないし晩期頃までのものが見受けられる。いずれも細片であるほか遺構に伴うものではないが、概して当地周辺には幅広い歴史的様相が展開されていたことが窺われる。

古　代

当遺跡からは計７点の古代に属する須恵器及び土師器も出土している。いずれも細片であるため型式や年代などには若干の検討も必要であろうが、概ね８世紀代から10世紀前葉までの範疇に属するものと思われる。数量的な面からみても、これらの出土遺物をもって当該期における様相を多く言及する状況にはないが、当調査区周辺に当該期の様相も存在したということをしめす点で一考に値する。

なお、当調査区から検出された諸遺構のうちの多くは同時共存をした一連のものである可能性が高いと思われる。自然科学分析の結果、溜池状遺構の中層は７世紀中頃から８世紀後半代に堆積した可能性がえられており、加えて同土層については比較的長い年月をかけて堆積した可能性が高いとみられることから、今回の検出遺構が古代に存続したものと断定するには比較的困難が伴うものと思われる。

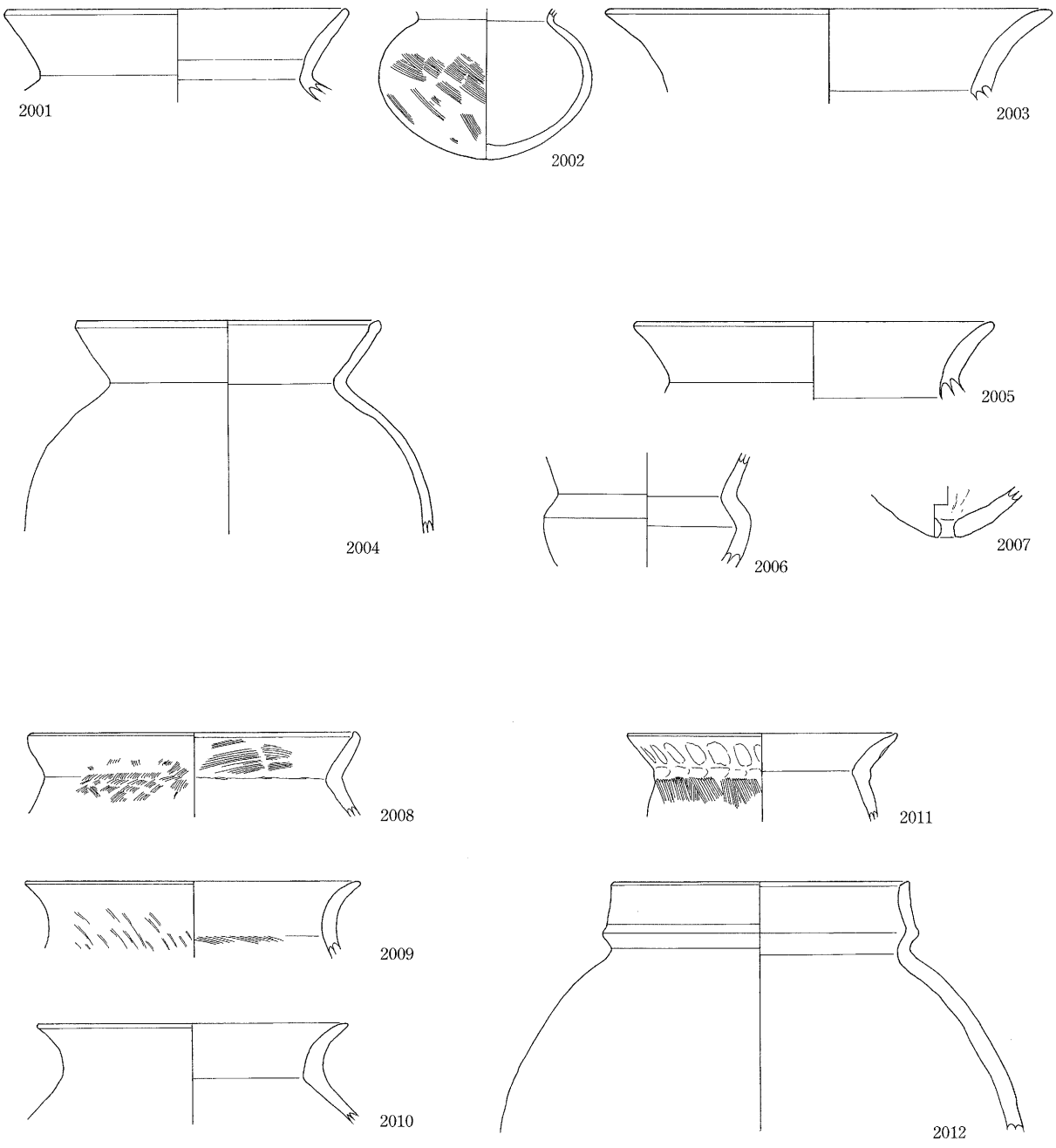


図３．遺物実測図Ⅰ（SK01：2001～2003　SK04：2004～2007　SX02：2008～2012）縮尺１/３

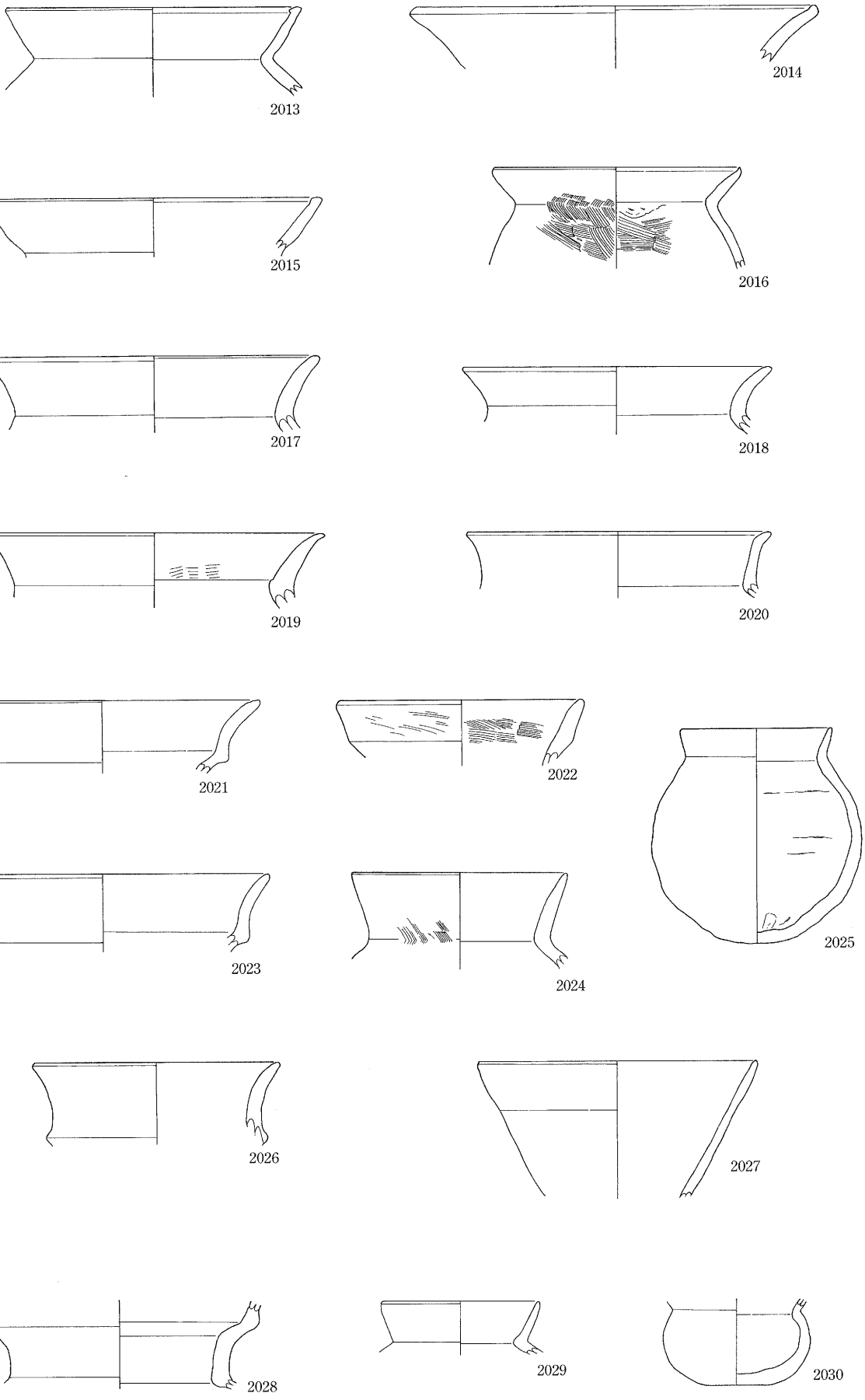


図４．遺物実測図Ⅱ（SX03）　縮尺１/３

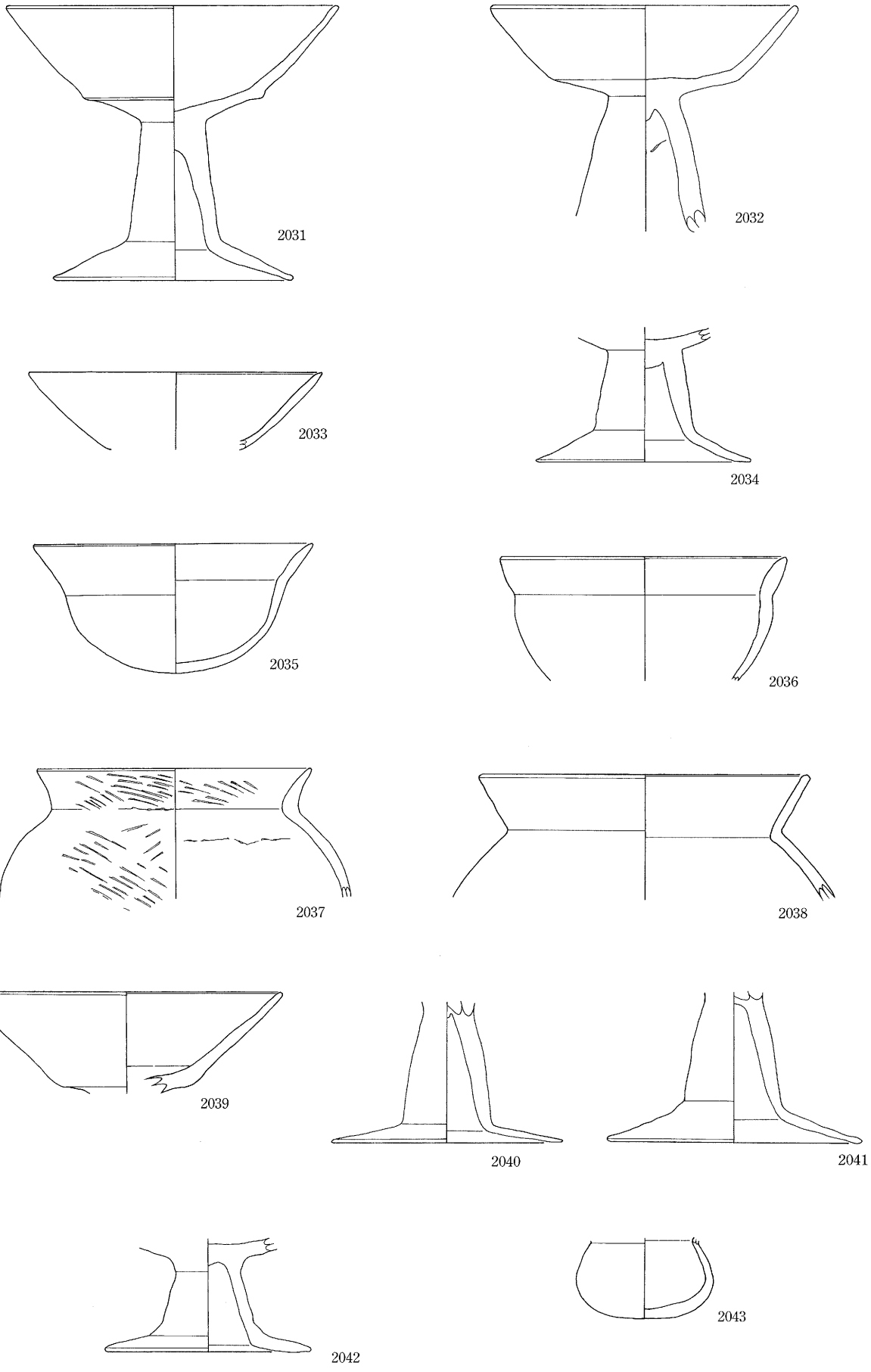


図５．遺物実測図Ⅲ（SX03：2031～2036　　SX04：2037～2043）　縮尺１／３

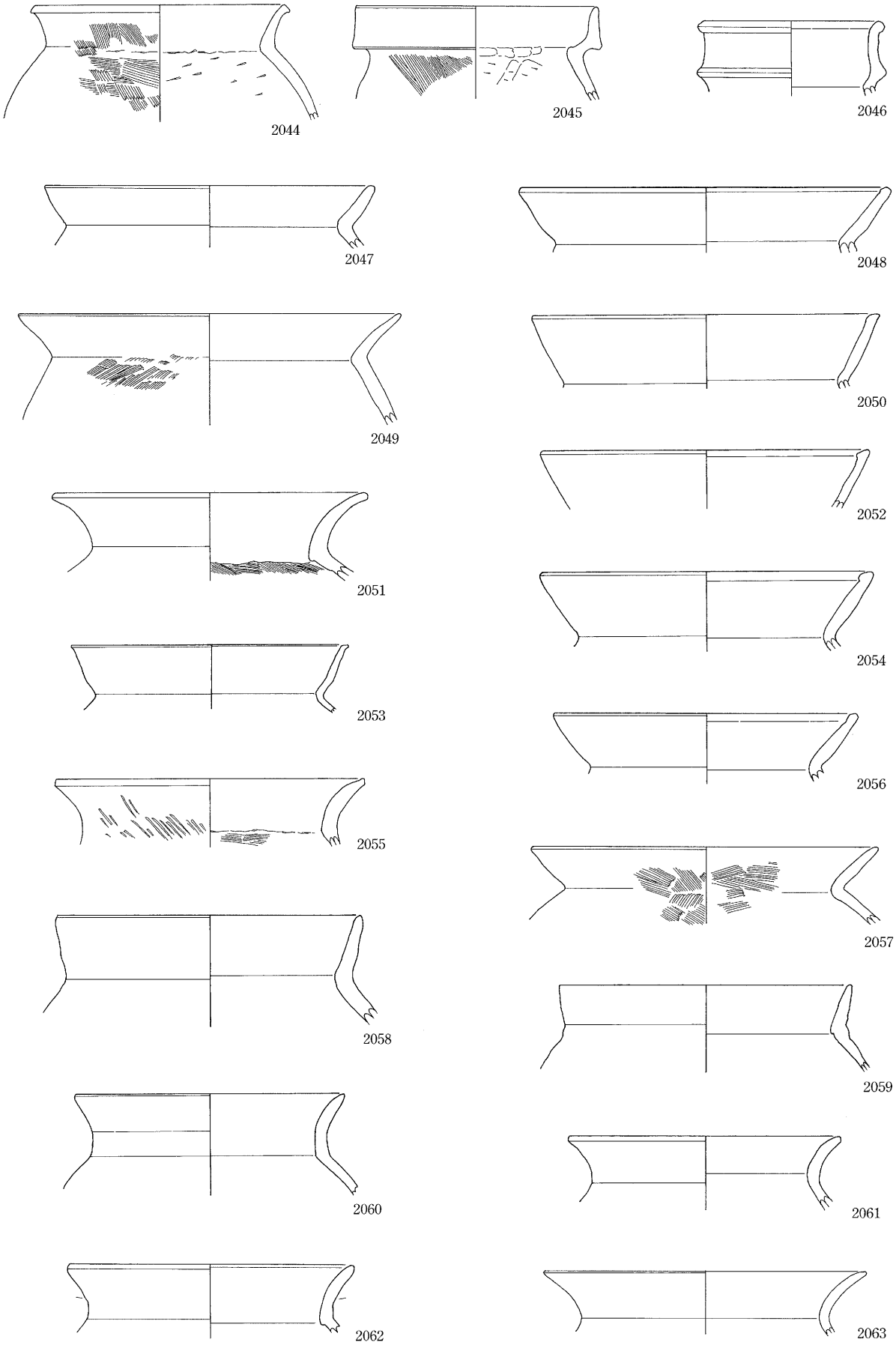


図６．遺物実測図Ⅳ（SD01）　縮尺１/３

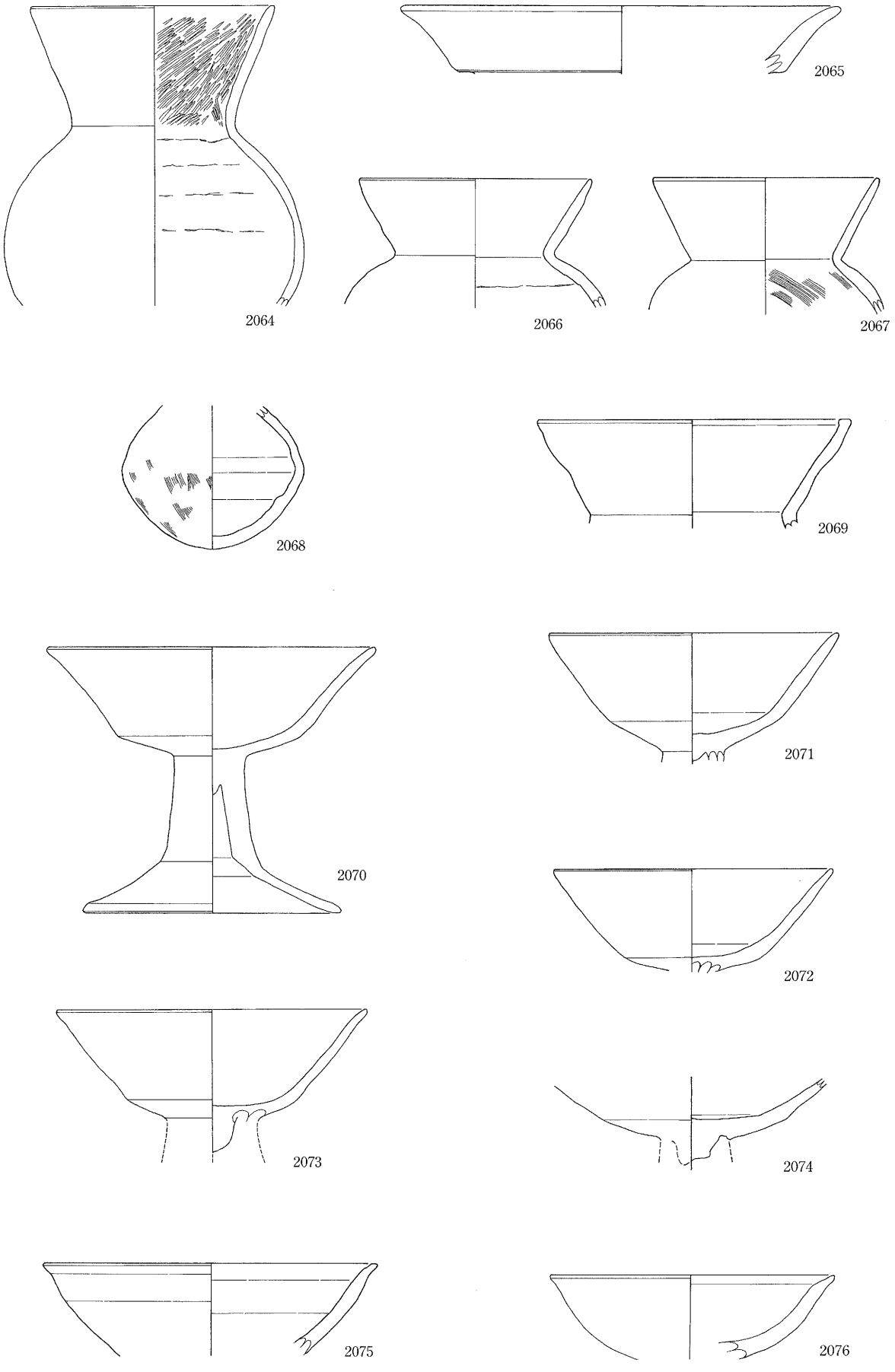


図７．遺物実測図Ⅴ（SD01）　縮尺１/３

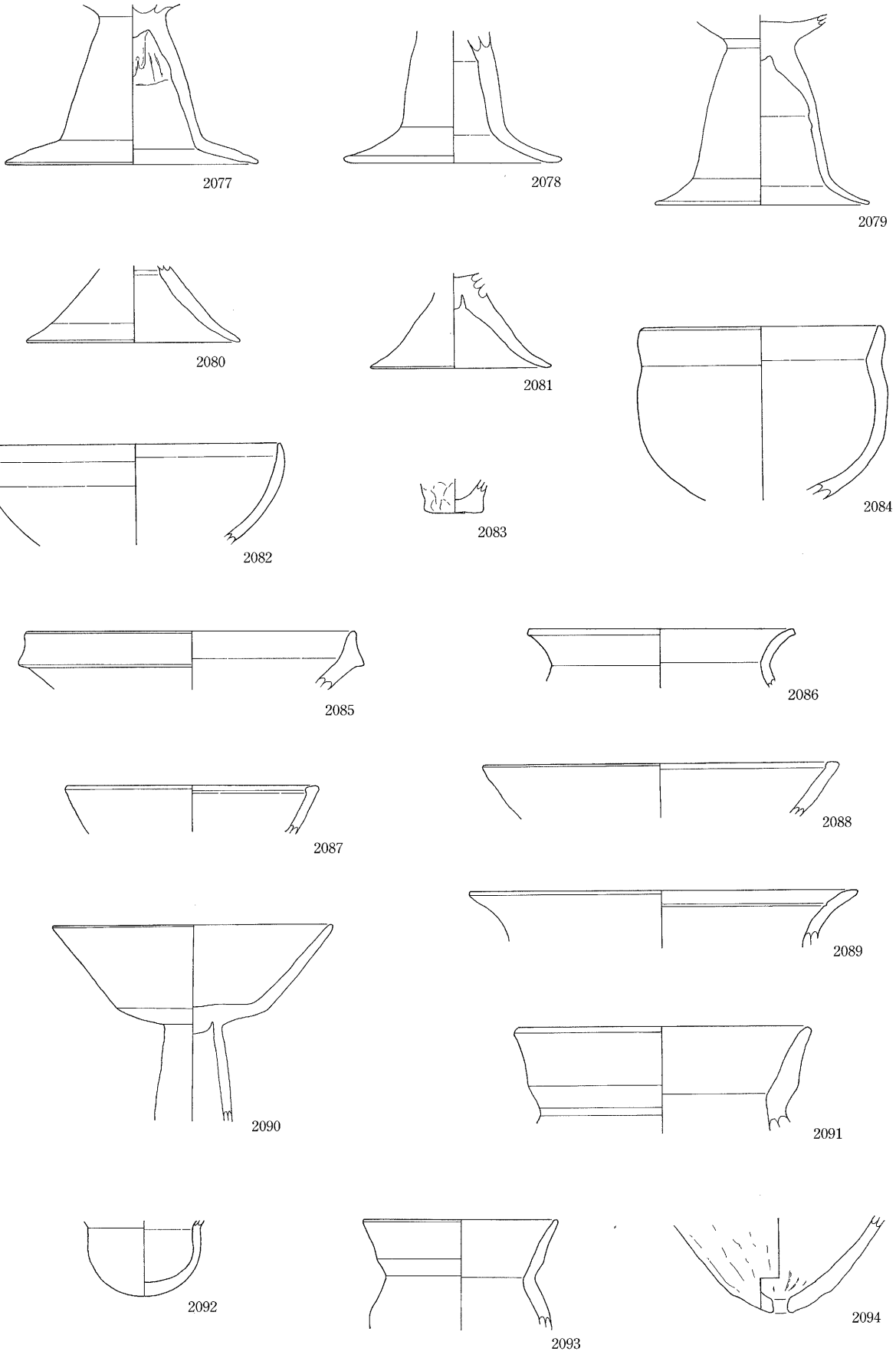
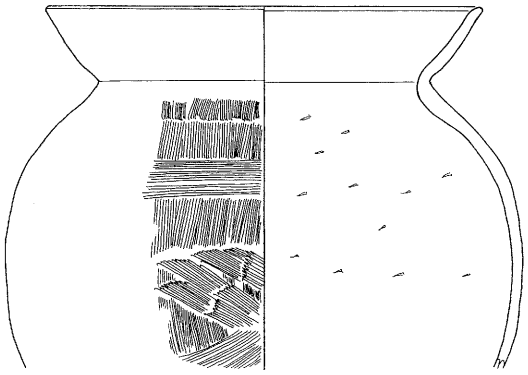
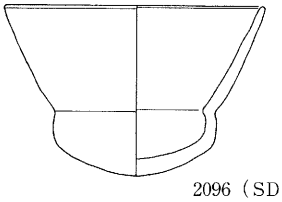


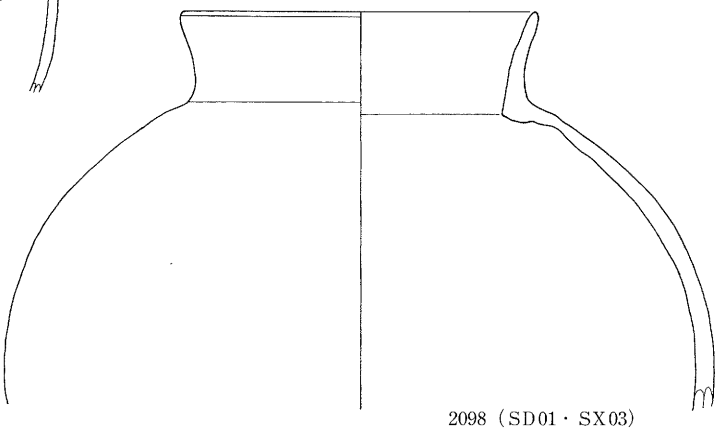
図８．遺物実測図Ⅵ　SD01：2077～2084　カクラン（旧SK03）：2085～2094　縮尺１/３



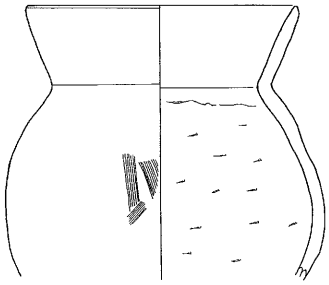
2095（SD01・SX01・SX03）



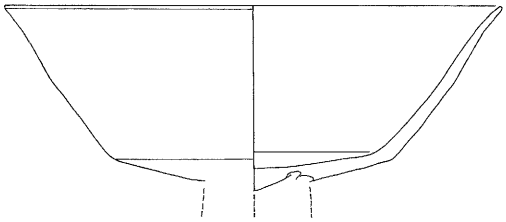
2096（SD01・SX03）



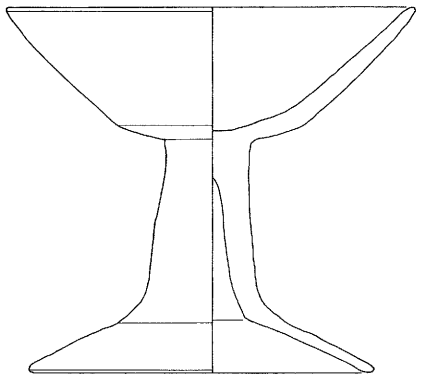
2098（SD01・SX03）



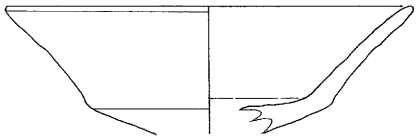
2097（SD01・SX01）



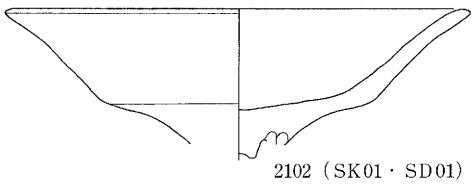
2099（SD01・SX03）



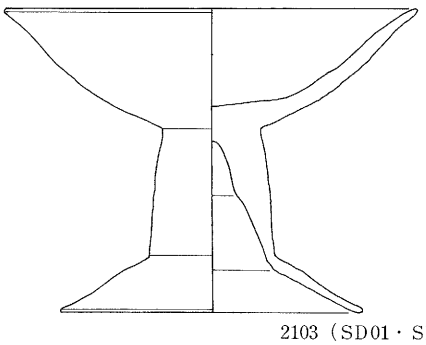
2100（SK01・SD01）



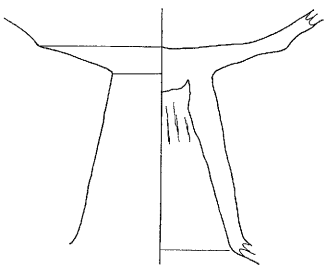
2101（SD01・SX04）



2102（SK01・SD01）



2103（SD01・SX04）



2104（SD01・SX04）

図９．遺物実測図Ⅶ　　縮尺１／３

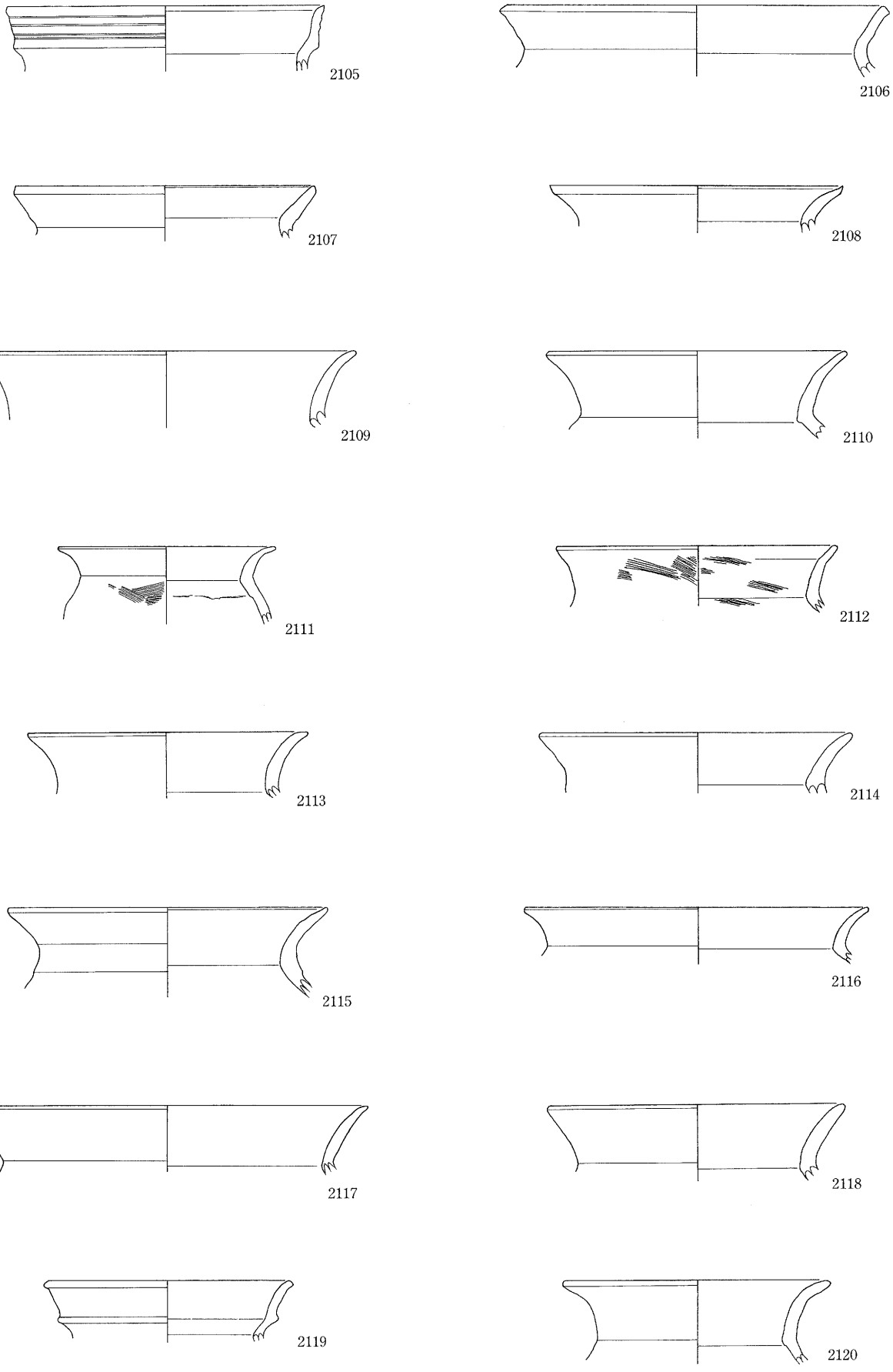
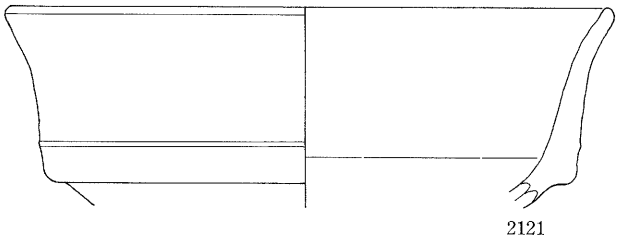
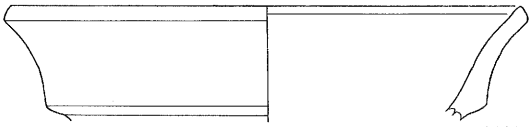
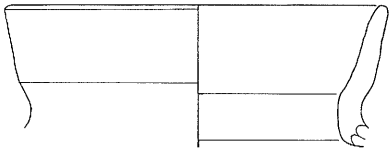


図10．遺物実測図Ⅷ（包含層）　縮尺１／３


2121


2122

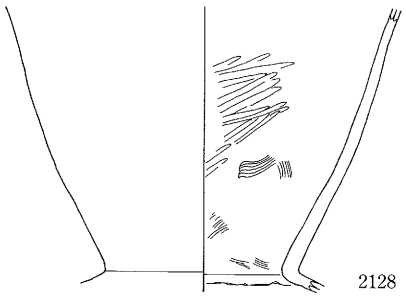

2123

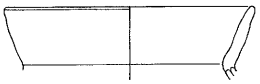
2124

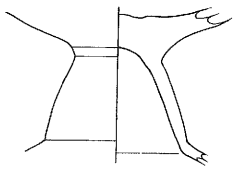
2125

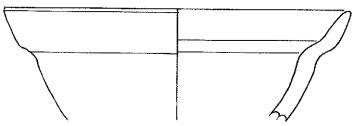
2126

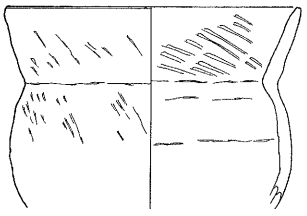
2127


2128


2129


2130


2131


2132

1001

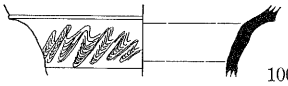

1002

図11. 遺物実測図Ⅸ（包含層）　縮尺１／３

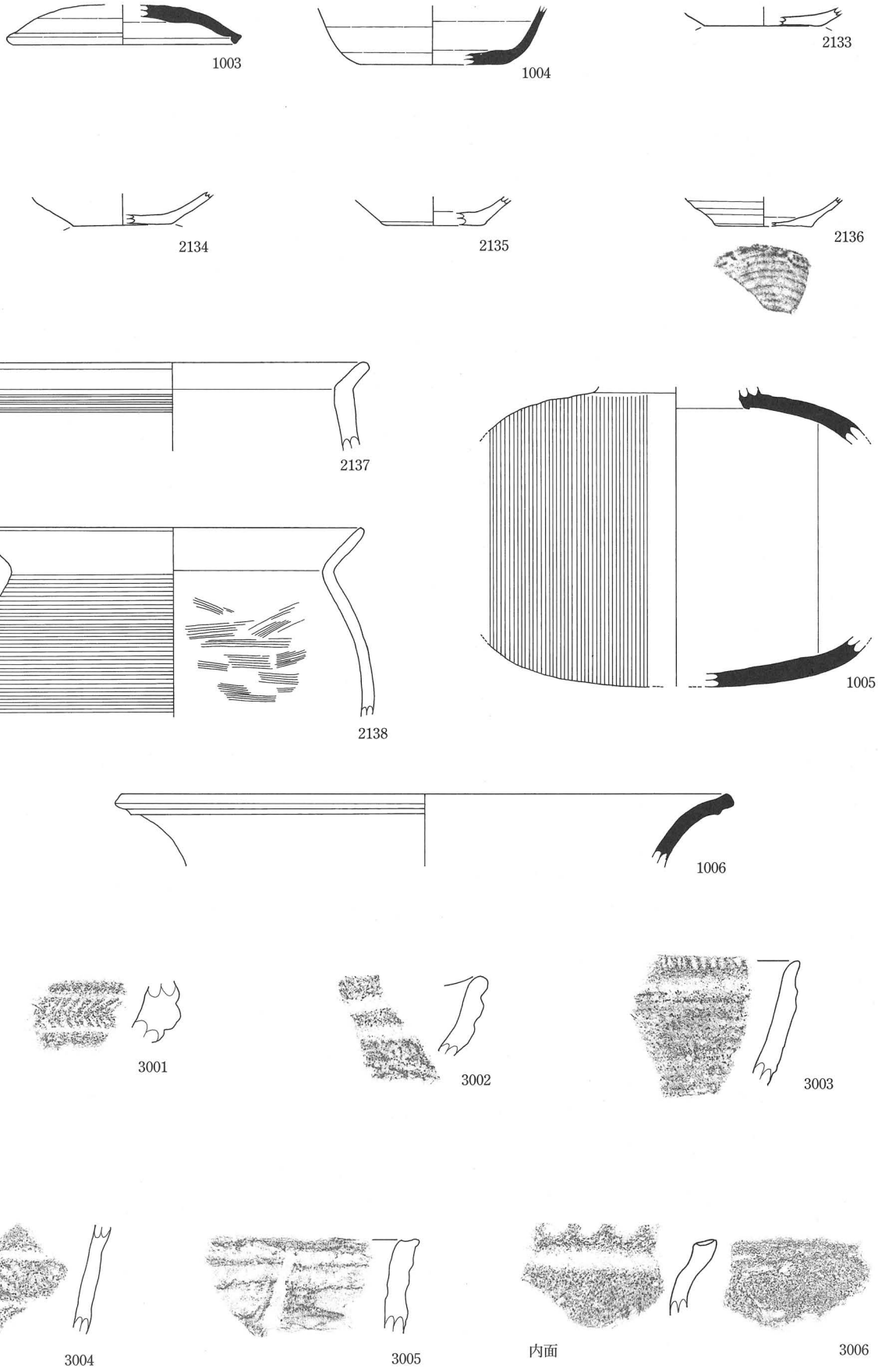


図12. 遺物実測図X（包含層）　縮尺：3001～3006まで1/2、他は1/3

遺物観察表

※ 器高はすべて残存高を記載した。

番号	遺構等	分　類	形　式	部　位	法　量			調　　整　　等
					口径	底径	器高	
1001	包含層	古墳須恵器	杯身	口縁部～体部	127	—	44	ＴＫ85相当か。
1002	包含層	古墳須恵器	𤭯	頸部	—	—	27	頸部外面に波状文　　ＴＫ216相当か。
1003	包含層	古代須恵器	杯Ｂ蓋	天井部～口端部	径113	—	20	内面にヘラ記号の可能性ある沈線あり。
1004	包含層	古代須恵器	杯Ａ	底部～口縁部	—	73	20	底部外面ヘラ切り
1005	包含層	古代須恵器	横瓶	体部	—	—	—	外面：カキメ
1006	包含層	古代須恵器	大甕	口縁部	306	—	37	外面：ナデ　　内面：ナデ
2001	SK01	古墳土師器	甕	口縁部	152	—	41	外面：ナデ　　内面：ナデ
2002	SK01	古墳土師器	小型丸底土器	胴部～底部	—	丸底	69.5	外面：ハケメ・一部にナデ　　内面：ナデ
2003	SK01	古墳土師器	壷	口縁部	198	—	43	外面：ナデ　　内面：ナデ
2004	SK04	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	135	—	97	外面：ナデ　　内面：ナデ
2005	SK04	古墳土師器	甕	口縁部	158	—	35	外面：ナデ　　内面：ナデ
2006	SK04	古墳土師器	小型鉢形土器	口縁部～胴上半部	—	—	52	外面：ナデ　　内面：ナデ
2007	SK04	古墳土師器	甑	底部付近	—	—	24	外面：ナデ　　内面：ナデ・口縁部の一部にハケメ残存。
2008	SX02	古墳土師器	甕	口縁部～頸部	146	—	39	外面：ナデ及びハケメ　　内面：ナデ及びハケメ
2009	SX02	古墳土師器	甕	口縁部	149	—	37	内外面ともナデ、一部にハケメ残存　全体的に調整が荒い。
2010	SX02	古墳土師器	甕	口縁部～頸部	139	—	45	外面：ナデ　　内面：ナデ
2011	SX02	古墳土師器	甕	口縁部～頸部	120	—	40	外面：口縁部に指頭圧痕・胴上半部にハケメ　　内面：ナデ
2012	SX02	古墳土師器	壷	口縁部～胴上半部	132	—	113	外面：ナデ　　内面：ナデ
2013	SX03	古墳土師器	甕	口縁部～頸部	146	—	46	外面：ナデ　　内面：ナデ
2014	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	200	—	30	外面：ナデ　　内面：ナデ

2015	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	169	—	29	
2016	SX03	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	123	—	51	内外面ともに、口縁部は主にナデ・くびれ部より下位にハケメ。
2017	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	166	—	39.5	外面：ナデ　内面：ナデ
2018	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	153	—	34	外面：ナデ　内面：ナデ
2019	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	170	—	38	外面：ナデ　内面：ナデ及び一部ハケメ残存。
2020	SX03	古墳土師器	甕	口縁部	152	—	33	外面：ナデ　内面：ナデ
2021	SX03	古墳土師器	壷又は甕	口縁部	158	—	38	外面：ナデ　内面：ナデ
2022	SX03	古墳土師器	壷又は甕	口縁部	123	—	34	外面：ナデ、一部ハケメが残存　内面：ナデ及びハケメ
2023	SX03	古墳土師器	壷又は甕	口縁部	168	—	38	外面：ナデ　内面：ナデ
2024	SX03	古墳土師器	壷又は甕	口縁部	109	—	49	外面：ナデ・口縁部下方に一部ハケメが残存。　内面：ナデ
2025	SX03	古墳土師器	小型甕	口縁部～底部	76	丸底	109	外面：ナデ　内面：ナデ・胴部に輪積み痕・底部にしぼり痕。　一部欠損
2026	SX03	古墳土師器	壷	口縁部（上部）	124	—	42	外面：ナデ　内面：ナデ
2027	SX03	古墳土師器	壷	口縁部	139	—	70	外面：ナデ　内面：ナデ
2028	SX03	古墳土師器	壷	頸部付近	—	—	44	外面：ナデ　内面：ナデ
2029	SX03	古墳土師器	小型壷か	口縁部	79	—	26	外面：ナデ　内面：ナデ
2030	SX03	古墳土師器	小型丸底土器	胴部～底部	—	32	45	外面：ナデ　内面：ナデ　磨耗著しい。
2031	SX03	古墳土師器	高杯	口縁部～脚裾部	171	120	144	外面：ナデ　内面：ナデ　一部欠損
2032	SX03	古墳土師器	高杯	杯部～脚部	159	—	118	外面：ナデ　内面：ナデ
2033	SX03	古墳土師器	高杯	杯部	152	—	40.5	外面：ナデ　内面：ナデ
2034	SX03	古墳土師器	高杯	脚部	—	111	70	外面：ナデ　内面：ナデ　磨耗著しい。
2035	SX03	古墳土師器	鉢	口縁部～底部	144	丸底	68	外面：ナデ　内面：ナデ　一部欠損
2036	SX03	古墳土師器	鉢	口縁部～胴下半部	147	—	64	外面：ナデ　内面：ナデ
2037	SX04	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	139	—	68	内外面ともナデ、一部ハケメ残存。内面の一部に輪積み痕残存。全体的に調整が荒い。

2038	SX04	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	168	—	67	口縁部：内外面ともナデ　　胴部：内外面とも一部ハケメ残存。
2039	SX04	古墳土師器	高杯	杯部	166	—	54	外面：ナデ　　内面：ナデ
2040	SX04	古墳土師器	高杯	脚部	—	119	74	外面：ナデ　　内面：ナデ
2041	SX04	古墳土師器	高杯	脚部	—	131	79	外面：磨き後ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2042	SX04	古墳土師器	高杯	脚部	—	107	58	外面：ナデ　　内面：ナデ
2043	SX04	古墳土師器	小型丸底土器	胴部～底部	—	24	42	外面：ナデ　　内面：ナデ
2044	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	131	—	62	外面：ハケメ　　内面：ナデ
2045	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	124	—	49	外面：口縁部ナデ・胴部ハケメ　内面：ナデ、胴部に成型時の調整痕残存。
2046	SD01	古墳土師器	壷	口縁部	92	—	39	外面：ナデ　　内面：ナデ
2047	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	170	—	33	外面：ナデ　　内面：ナデ
2048	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	192	—	36	外面：ナデ　　内面：ナデ
2049	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	198	—	60	外面：口縁部ナデ・胴部ハケメ　　内面：ナデ
2050	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	179	—	41	外面：ナデ　　内面：ナデ
2051	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	161	—	46	外面：ナデ　　内面：口縁部ナデ・胴部上端付近にハケメ残存。
2052	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	169	—	31	外面：ナデ　　内面：ナデ
2053	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	144	—	34	外面：ナデ　　内面：ナデ
2054	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	170	—	41	外面：ナデ　　内面：ナデ
2055	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	160	—	36	内外面とも最終調整はナデ、外面と内面の下方にハケメ残存。全体的に調整が荒い。
2056	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	156	—	37	外面：ナデ　　内面：ナデ
2057	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	179	—	42	外面：ハケメ　　内面：ハケメ
2058	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	158	—	59	外面：ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2059	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	151	—	46	外面：ナデ　　内面：ナデ
2060	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	139	—	53	外面：ナデ　　内面：ナデ

2061	SD01	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	141	—	39	外面：ナデ　　内面：ナデ
2062	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	149	—	39	外面：ナデ　　内面：ナデ
2063	SD01	古墳土師器	甕	口縁部	167	—	32	外面：ナデ　　内面：ナデ
2064	SD01	古墳土師器	壷	口縁部～胴下半部	123	—	156	外面：ナデ　　内面：口縁部ミガキ・胴部ナデ及び輪積み痕残存。
2065	SD01	古墳土師器	壷	口縁部	221	—	36	外面：ナデ　　内面：ナデ
2066	SD01	古墳土師器	壷	口縁部～胴上半部	117	—	68	外面：ナデ　　内面：ナデ
2067	SD01	古墳土師器	壷	口縁部～胴上半部	115	—	72	外面：ナデ　　内面：口縁部ナデ・胴部の一部にハケメ残存。
2068	SD01	古墳土師器	小型丸底土器	胴部～底部	—	丸底	74	外面：ナデ・一部にハケメ残存　　内面：ナデ
2069	SD01	古墳土師器	壷	口縁部	160	—	56	外面：ナデ　　内面：ナデ
2070	SD01	古墳土師器	高杯	ほぼ完形	169	133	138	外面：ナデ　　内面：ナデ
2071	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	147	—	68	外面：ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2072	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	142	—	54	外面：ナデ　　内面：ナデ
2073	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	158	—	74	外面：ナデ　　内面：ナデ
2074	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	—	—	46	外面：ナデ　　内面：ナデ
2075	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	172	—	48	外面：ナデ　　内面：ナデ
2076	SD01	古墳土師器	高杯	杯部	145	—	43	外面：ナデ　　内面：ナデ
2077	SD01	古墳土師器	高杯	脚部	—	129	83	外面：ナデ　　内面：ナデ・上方にしぼり
2078	SD01	古墳土師器	高杯	脚部	—	111	69	外面：ナデ　　内面：ナデ
2079	SD01	古墳土師器	高杯	脚部	—	108	99	外面：ナデ・一部にハケメ残存　　内面：ナデ・しぼり
2080	SD01	古墳土師器	高杯又は器台	脚部	—	110	39	外面：ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2081	SD01	古墳土師器	高杯又は器台	脚部	—	92	50	外面：ナデ　　内面：ナデ
2082	SD01	古墳土師器	椀	口縁部	148	—	52	外面：ナデ　　内面：ナデ
2083	SD01	古墳土師器	ミニチュア土器	底部	—	28	17	外面：ナデ　　内面：ナデ

2084	SD01	古墳土師器	鉢	口縁部～胴下半部	119	—	140	外面：ナデ　内面：ナデ
2085	カクラン	古墳土師器	壷	口縁部	167	—	30	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2086	カクラン	古墳土師器	甕	口縁部	133	—	31	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2087	カクラン	古墳土師器	甕	口縁部	127	—	24	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2088	カクラン	古墳土師器	甕	口縁部	177	—	27	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2089	カクラン	古墳土師器	壷	口縁部	197	—	29	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2090	カクラン	古墳土師器	高杯	杯部～脚部	141	—	101	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2091	カクラン	古墳土師器	壷	口縁部	147	—	55	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2092	カクラン	古墳土師器	小型丸底土器	胴部～底部	—	丸底	39	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2093	カクラン	古墳土師器	小型壷	口縁部～胴上半部	97	—	57	外面：ナデ　内面：ナデ　旧SK03
2094	カクラン	古墳土師器	甑	胴下半部～底部	—	—	49	外面：ナデ　内面：ナデ・孔の付近にしぼり痕　胎土に石英粒混入。旧SK03
2095	重複	古墳土師器	甕	口縁部～胴下半部	168	—	143	外面：口縁部ナデ・胴部ハケメ　内面：ナデ　遺構（SD01・SX01・SX03）
2096	重複	古墳土師器	小型丸底土器	ほぼ完形	101	丸底	168	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SK01・SD01・SX03）
2097	重複	古墳土師器	甕	口縁部～胴下半部	104	—	108	外面：口縁部ナデ・胴部の一部ハケメ　内面：口縁部ナデ　遺構（SD01・SX01）
2098	重複	古墳土師器	壷	口縁部～胴上半部	136	—	157	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SD01・SX03）
2099	重複	古墳土師器	高杯	杯部	193	—	73	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SD01・SX01）
2100	重複	古墳土師器	高杯	一部欠損	160	134	145	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SK01・SD01）
2101	重複	古墳土師器	高杯	杯部	158	—	50	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SD01・SX04）
2102	重複	古墳土師器	高杯	杯部	177	—	55	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SK01・SD01）
2103	重複	古墳土師器	高杯	一部欠損	160	118	120	外面：ナデ　内面：ナデ　遺構（SD01・SX04）
2104	重複	古墳土師器	高杯	杯部～脚部	—	—	101	外面：ナデ　内面：ナデ・脚部上方にしぼり　遺構（SD01・SX04）
2105	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	160	—	33	外面：擬口縁及びナデ　内面：ナデ
2106	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	191	—	36	外面：ナデ　内面：ナデ

2107	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	151	—	28	外面：ナデ　　内面：ナデ
2108	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	148	—	25	外面：ナデ　　内面：ナデ
2109	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	189	—	39	外面：ナデ　　内面：ナデ
2110	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	149	—	45	外面：ナデ　　内面：ナデ
2111	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	109	—	39	外面：口縁部ナデ・胴部ハケメ　　内面：ナデ・一部に輪積み痕残存。
2112	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	140	—	31	外面：ナデ及びハケメ　　内面：ナデ及びハケメ
2113	包含層	古墳土師器	甕	頸部	141	—	34	外面：ナデ　　内面：ナデ
2114	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	156	—	31	外面：ナデ　　内面：ナデ
2115	包含層	古墳土師器	甕	口縁部～胴上半部	161	—	46	外面：ナデ　　内面：ナデ
2116	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	174	—	30	外面：ナデ　　内面：ナデ
2117	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	202	—	34	外面：ナデ　　内面：ナデ
2118	包含層	古墳土師器	甕	口縁部	148	—	40	外面：ナデ　　内面：ナデ
2119	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	122	—	32	外面：ナデ　　内面：ナデ
2120	包含層	古墳土師器	壷又は甕	口縁部	133	—	43	外面：ナデ　　内面：ナデ
2121	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	234	—	79	外面：ナデ　　内面：ナデ
2122	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	199	—	46	外面：ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2123	包含層	古墳土師器	壷	口縁部～頸部	147	—	56	外面：ナデ　　内面：ナデ
2124	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	187	—	30	外面：ナデ　　内面：ナデ
2125	包含層	古墳土師器	壷	口縁部～頸部	150	—	43	外面：ナデ　　内面：ナデ
2126	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	102	—	26	外面：ナデ　　内面：ナデ
2127	包含層	古墳土師器	鉢	口縁部	95	—	30	外面：ナデ　　内面：ナデ
2128	包含層	古墳土師器	壷	口縁部	—	—	112	外面：ナデ　　内面：ミガキ及びナデ、一部にハケメ残存。
2129	包含層	古墳土師器	鉢	口縁部	97	—	29	外面：ナデ　　内面：ナデ

2130	包含層	古墳土師器	高杯又は器台	杯部又は受部～脚部	—	—	62	外面：ナデ　　内面：ナデ　　磨耗著しい。
2131	包含層	古墳土師器	鉢	口縁部～胴下半部	133	—	44	外面：ナデ　　内面：ナデ
2132	包含層	古墳土師器	小型甕	口縁部～胴下半部	113	—	80	内外面ともにナデ　外面と内面の口縁部にハケメが残存。全体的に調整が荒い。
2133	包含層	古代土師器	杯A	底部	—	59	10	外面：口縁部ナデ・底外面に回転糸切痕　　内面：ナデ
2134	包含層	古代土師器	杯A	底部	—	49	16	内外面とも磨耗により調整不明。
2135	包含層	古代土師器	杯A	底部	—	50	14	内外面とも磨耗により調整不明。
2136	包含層	古代土師器	杯A	底部	—	48	15	外面：口縁部ナデ・底外面に回転糸切痕　　内面：ナデ
2137	包含層	古代土師器	甕	口縁部～胴上半部	195	—	45	外面：口縁部ナデ・胴部カキメ　　内面：ナデ
2138	包含層	古代土師器	甕	口縁部～胴上半部	190	—	96	外面：口縁部ナデ・胴部カキメ　　内面：口縁部ナデ・胴部ハケメ
3001	包含層	縄文土器	不明	不明	—	—	32	上山田・天神山式　半隆起線文上に刻み
3002	包含層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	39	半隆起線文　摩耗著しい
3003	包含層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	64	口唇部に刻み　沈線　摩耗著しい
3004	包含層	縄文土器	深鉢	胴部か？	—	—	54	摩消縄文　平行沈線　摩耗著しい
3005	包含層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	48	口唇部と外面に指押さえ
3006	包含層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	38	口唇部に刻み　内面の口縁部に凹線

第4章　自然科学分析

富山県高岡市に所在する五十里沼田遺跡は、射水平野北西部の小矢部川左岸の丘陵地内を流れる支谷に沿った微高地上に立地する。本遺跡の発掘調査では畝状遺構をはじめ、土坑や溝状遺構、そして溜池の機能を有すると考えられた諸遺構が検出されている。

上記した溜池状遺構の覆土には、木片や種実遺体等を含む泥炭層（第2層）が認められ、遺構の年代や周辺の植生等を検証する良好な試料と推測されたため、同遺構にみとめられた泥炭層及び木材を対象に、放射性炭素年代測定のほか、花粉分析・種実遺体分析・樹種同定といった諸事項の分析を実施した。

1．試　料

試料は、溜池状遺構の泥炭層より採取された土壌と木材各1点、同遺構中から出土した倒木1点の計3点である。これらの試料のうち、土壌（泥炭層）を対象に花粉分析・種実遺体分析を行う。また、泥炭層中より抽出した木材を対象に放射性炭素年代測定を行うほか、本試料及び倒木を対象に樹種同定を行った。

2．分析方法

(1). 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得てβ線計数法により行った。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え、計算を行っている。

(2). 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、検出された花粉化石の出現傾向を層位的に検討するために、層位分布図を作成する。各種類の出現率は、木本花粉化石はその総数、草本花粉とシダ類胞子は、総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で求める。

(3). 種実遺体分析

土壌試料200cc程度を水に一晩液浸し試料の泥化を促す。0.5㎜の篩を通して水洗し残渣をシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川1994）、日本植物種子図鑑（中山他2000）等と比較して種類を同定し個数を数える。

なお、微細片を含み個数推定が困難である種類は、破片と表示する。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存を施す。

(4). 樹種同定

木材は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察及び同定をする。

3．結　果

(1). 放射性炭素年代測定

泥炭層から抽出された木材（オニグルミ）の年代値（補正年代）は、1330±　60BP（1330±130：2σ）を示し、今回の分析結果に基づく較正年代は、cal. AD 645－771（cal. AD 559－873：2σ）である。

表１．放射性炭素年代測定結果

試料番号	種類	補正年代（BP）		δ13C (‰)	Code No.
		σ	2σ		
泥炭層	オニグルミ	1330±60	1330±130	－27.3	IAA－514

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料	補正年代 BP (測定誤差)	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
泥炭層	1330±60 (σ)	cal AD 645 - cal AD 723	cal BP 1,305 - 1,227	0.759	IAAA－514
		cal AD 741 - cal AD 771	cal BP 1,209 - 1,179	0.241	
	1330±130 (2σ)	cal AD 599 - cal AD 783	cal BP 1,351 - 1,167	0.919	
		cal AD 788 - cal AD 832	cal BP 1,162 - 1,118	0.047	
		cal AD 838 - cal AD 873	cal BP 1,112 - 1,077	0.033	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4
(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
付記した誤差は、測定誤差を年代値に換算した値。

(2). 花粉分析

結果を表３、図１に示す。全体として木本花粉主体の組成である。木本花粉は、マツ属、スギ属、クルミ属、サワグルミ属、ブナ属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などが検出されるが、いずれも10%前後であり顕著に検出される種類は認められない。一方、草本花粉ではイネ科やマメ科などが認められる。

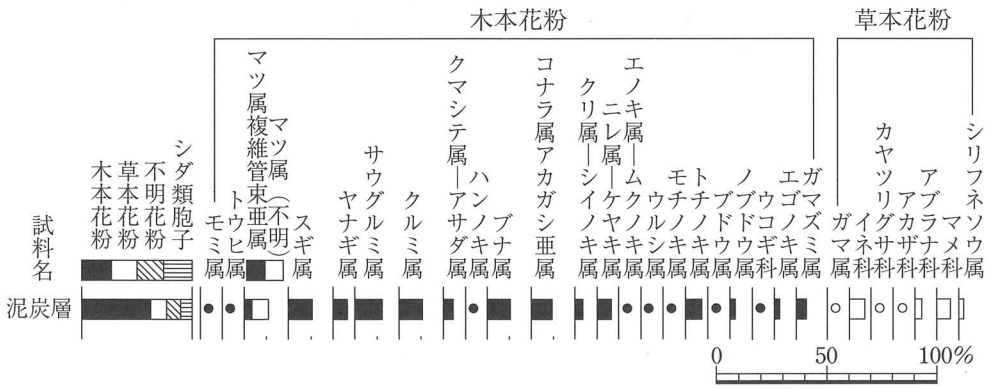


図１．花粉化石群集
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

(3). 種実遺体分析

結果を表４に示す。被子植物19分類群の種実のほか、木材、炭化材、部位・種類不明の炭化物、蘚苔類、昆虫遺骸の破片なども確認された。検出された種実の遺存状態は比較的良好で、木本12分類群34個、草本７分類群18個が同定された。以下に、本分析で同定された種実の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

＜木本＞

・イヌシデ（*Carpinus Tschonoskii* maxim.）　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、広卵形、側面は広皮針形で先端はやや尖る。長さ4.5㎜、幅４㎜、厚さ1.5㎜程度。果皮表面は平滑で、果皮両面にはそれぞれ６本程度の縦隆条が配列する。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

果実の破片が検出された。黒褐色、完形ならば卵体。破片の大きさ6.5㎜程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられる。柱頭を欠損するため、種までの同定に至らずアカガシ亜属にとどめた。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色、三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ1.8㎜、幅1.7㎜程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・カジノキ属（*Broussonetia*）　クワ科

種子が検出された。黄～茶褐色、長方形状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。径1.8㎜程度。基部に突起を持つ。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

・マタタビ属（*Actinidia*）　マタタビ科

種子の破片が検出された。茶褐色、完形ならば楕円形で両凸レンズ形。破片の大きさ1.2㎜程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。基部は丸く大きな臍点が湾入し、頂部はわずかに尖る。長さ6.5㎜、幅６㎜、厚さ３㎜程度。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られる。内果皮は厚く硬く、表面はざらつく。

・キハダ（*Phellodendron ammrense* Ruprecht）　ミカン科キハダ属

核（内果皮）が検出された。黒色、半横広卵形でやや偏平。長さ５㎜、幅３㎜、厚さ1.5㎜程度。種皮は厚く硬い。表面には浅く細かい網目模様があり、ざらつく。

・ミツバウツギ（*Staphylea bumalda* DC.）　ミツバウツギ科ミツバウツギ属

核が検出された。黄灰色、倒卵形でやや偏平。長さ5.7㎜、幅4.2㎜、厚さ３㎜程度。基部に斜めにつく臍は横楕円形で深く凹む。臍の上縁は嘴状。種皮表面はやや平滑で光沢が強い。

・イイギリ（*Idesia polycarpa* Maxim.）　イイギリ科イイギリ属

表３．花粉分析結果

種　類	試料名　泥炭層
木本花粉	
モミ属	1
トウヒ属	1
マツ属複維管束亜属	3
マツ属（不明）	8
スギ属	10
ヤナギ属	6
サワグルミ属	12
クルミ属	10
クマシデ属－アサダ属	4
ハンノキ属	1
ブナ属	10
コナラ属アカガシ亜属	9
クリ属－シイノキ属	3
ニレ属－ケヤキ属	6
エノキ属－ムクノキ属	1
ウルシ属	1
モチノキ属	1
トチノキ属	7
ブドウ属	1
ノブドウ属	2
ウコギ科	1
エゴノキ属	2
ガマズミ属	4
草本花粉	
ガマ属	1
イネ科	10
カヤツリグサ科	1
アカザ科	1
アブラナ科	4
マメ科	8
ツリフネソウ属	2
不明花粉	21
シダ類胞子	
シダ類胞子	19
合　計	
木本花粉	104
草本花粉	27
不明花粉	21
シダ類胞子	19
総計（不明を除く）	150

種子が検出された。灰褐色、広倒卵体。長さ２㎜、径1.5㎜程度。頂部に大きな円形の窪みがある。頂部から基部の臍に向かって一本の溝がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

・ツツジ科（Ericaceae）

種子が検出された。赤褐色、楕円形、長楕円形など不定形で偏平。種子本体は狭楕円形で偏平。縁は膜状の翼がある。翼表面には縦長の網目模様が配列する。

・ムラサキシキブ属（*Callicarpa*）　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。淡－黄褐色、偏平で卵形。長さ2.5㎜、幅1.5㎜程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

・ニワトコ（*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara）　スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、炭化個体は黒色。広倒卵形でやや偏平、長さ2.5㎜、幅1.2㎜程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

＜草本＞

・カラムシ属（*Boehmeria*）　イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2㎜程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形黒色、卵形でやや偏平。長さ３㎜、幅2.2㎜程度。果実表面は平滑で光沢が強い。花被が残る個体もみられた。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla*－*Duchesnea*－*Fragaria*）　バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ1.1㎜、幅0.7㎜程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・ツリフネソウ（*Impatiens Textori* Miq.）　ツリフネソウ科ツリフネソウ属

種子の破片が検出された。黒色、完形ならば楕円体で、基部は三稜形の短い嘴状突起がある。破片の大きさ4.5㎜程度。種皮は硬く、表面には不規則に絡み合った浅く光沢の強い隆起がある。

・セリ科（Umbelliferae）

果実が検出された。黄褐色、長楕円形で偏平。長さ4.5㎜、幅1.7㎜程度。基部は尖る。果実表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・メハジキ属（*Leonurus*）　シソ科

果実が検出された。淡灰褐色で広倒被針状六稜形。長さ2.2㎜、径1.3㎜程度。背面は丸みがあり、腹面の正中

表４．種実同定結果

分類群	部位	個数
木本種実		
イヌシデ	果実	1
コナラ属アカガシ亜属	果実	1
ヤマグワ	種子	1
カジノキ属	種子	1
マタタビ属	種子	1
サクラ属	核	1
キハダ	核	1
ミツバウツギ	核	16
イイギリ	種子	3
ツツジ科	種子	6
ムラサキシキブ属	核	1
ニワトコ	核	1
草本種実		
カラムシ属	果実	1
タデ属	果実	7
キジムシロ属－ヘビイチゴ属－		
オランダイチゴ属	核	1
ツリフネソウ	種子	1
セリ科	果実	6
メハジキ属	果実	1
ナス科	種子	1
木材		破片
炭化材		破片
不明炭化物		破片
蘚苔類		破片
昆虫遺骸		破片

表中の数字は、堆積物200cc(288.1ｇ)に含まれる種実の個数を示す。
破片は、微細片を含み個数の推定が困難である種類を示す。

線上と左右の縁は稜をなす。基部は舌状。表面はやや平滑。

・ナス科（Solanaceae）

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.8㎜程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には臍を中心として同心円状に星型状の網目模様が発達する。

(4). 樹種同定

２点の試料は、いずれも落葉広葉樹のオニグルミに同定された。泥炭層から抽出された木材は根株材、倒木片は幹材であった。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）　　クルミ科クルミ属

＜幹材＞

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または２－４個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近でやや急に管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１－４細胞幅、１－40細胞高。

＜根株材＞

散孔材で、基本的な組織配列は幹材に良く似ているが、春材部の道管径が幹材より大きく、夏材部では幹材より小さくなり、全体として道管径の変化が大きい。また、道管壁が幹材に比較して薄い。これらの点から幹材ではなく、根株材に同定した。

4．考　察

泥炭層から抽出された木材の放射性炭素年代測定の結果、溜池状遺構の中層については７世紀中頃から８世紀後半のまでの年代値を示した。したがって、発掘調査で検出された遺物等から推測される出土遺物の年代幅と照合するならば比較的新しい年代に位置づけられることとなる。

この時期は、海岸線の後退によって生じた潟湖が急速に縮小することにより、射水平野各所で泥炭地が形成されたと考えられている（藤井2000）。今回検出された遺構に堆積した泥炭層も、このような一連の地形変遷の中で形成された可能性がある。

また、当泥炭層の花粉分析結果では、木本花粉を主体とし、顕著に検出される種類が認められないことが特徴と言える。さらに、同試料から検出された種実遺体も木本類が多く、その中でも林縁など明るい林地を好む種類の産出が目立つ。このことから、泥炭層で確認された花粉化石及び大型植物化石は木本類を主体する点で共通する傾向を示し、丘陵と低地との境界付近に生育していた植物が溜池状遺構に埋積し、泥炭層が形成されたと推測される。

上記分析結果による年代において遺跡周辺に生育していたと思われる種類は、スギ・ヤナギ属・オニグルミ・サワグルミ・シデ類（イヌシデなど）・コナラ属アカガシ亜属・ブナ属・ニレ属－ケヤキ属・ヤマグワ・カジノキ属・サクラ属・キハダ・マタタビ属・イイギリ・トチノキ・ミツバウツギ・ツツジ科・ムラサキシキブ属・ニワトコ・ガマズミ属等である。大部分は中～低木の落葉樹であり、低地と丘陵との境界や、集落と森林との境界などの林縁を中心に生育していたものと考えられる。草本類では、カラムシ属・タデ属・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属・ツリフネソウ・セリ科・メハジキ属・ナス科といったものが検出されており、これらは人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類である。本遺跡では畝状遺構が検出されていることから、これらの畑作地等に生育していた草本類も含まれると考えられる。

ちなみに、縄文時代の射水平野や十二潟で行われた花粉分析結果ではハンノキ属をはじめとした低湿地林を形成する種類が多産する（安田1982ａ，ｂ；下村教育委員会1999など）ことや、布目沢東遺跡（大門町）では縄文時代末～古墳時代にかけてハンノキ属が優勢な花粉化石群集を示す（パリノ・サーヴェイ株式会社1991）ことが

確認されている。本遺跡の分析結果ではハンノキ属をはじめとする低湿地林を形成する種類が優占する傾向は認められない。このことから、本遺跡が立地する縁辺部から低地は植生が異なっており、これは本遺跡が立地する支谷内の局地性を示していると思われる。

今回の自然科学分析により検出された種実遺体の中では、ヤマグワ、カジノキ属、マタタビ属など食用となるもの、カジノキ属のように繊維の利用が可能な植物が含まれていることから、これらを採取・利用することは可能であったと考えられる。

なお、今回は溜池状遺構の中層よりサンプルを抽出し、冒頭で述べた諸分析を行なったが、本遺構の構築時期と泥炭層の形成時期には年代差がある可能性が高いことを付記しておきたい。

【引用文献】

藤井昭二　「大地の記憶」『富山の自然史』桂書房　2000

パリノ・サーヴェイ株式会社　「布目沢東遺跡自然科学分析報告」『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)　－布目沢東遺跡・布目沢西遺跡』富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会編　1991

下村教育委員会　『富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告』下村教育委員会編　1999

安田喜憲　「a.花粉分析」『小泉遺跡－県道改修工事に伴う調査－』大門町教育委員会編　1982

安田喜憲　「b.花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡　－ナラ林文化と環日本海文化圏－」『小泉遺跡－県道改修工事に伴う調査－』大門町教育委員会編　1982

分析：　パリノ・サーヴェイ株式会社
植木真吾・高橋敦・斉藤崇人・松元美由紀

第5章　結　章

五十里沼田遺跡における平成15年度の発掘調査成果について述べてきた。今回の調査区からは多数の遺構や遺物が検出されたが、とりわけ古墳時代の前期から後期にいたる遺物が出土したことは、周辺地域における歴史研究をすすめていくうえでも注目に値する成果と言えるであろう。

自然科学分析の成果を鑑みるならば、溜池状遺構をはじめとする当調査区の多くの遺構は古墳時代末頃から古代にかけて営まれていた可能性が高い。ただし、長期且つ多量に及ぶ古墳時代の検出物を、本書に掲載した諸遺構だけで説明することも困難である。したがって、調査区外に当該期の活動拠点があった可能性があり、ついては今後における周辺地区の発掘調査にも期待が高まったものと考えるべきであろう。

なお、当該地における従来までの研究成果としては、西山丘陵に所在する古墳などへのそれ〔富山考古学会1999他〕や東大寺領須加荘の比定地研究〔木倉1936・金田1998他〕が特記される。しかし、古墳時代研究においては同時代前期へのそれに多くの注意がされてきた傾向にあり、中・後期への検討は必ずしも顕著とはいえない。それは当該期の資料が希少であったことがそもそもの原因であるが、今回の調査成果はそうした面においても当該地域における研究を補強する貴重な資料の追加をみたものと考える次第である。

今回の発掘調査は945㎡を調査対象とするという比較的小規模なものであり、遺跡全体の一角を把握したにすぎないため、これだけで当該地域の歴史的様相のすべてを解明することはできない。しかし、五十里沼田遺跡としては初の本発掘調査が試みられたということのほか、従来までの資料的空白を埋める成果も挙げることができたことは、概して上記した大命題に近づくための第一歩になったものといえるであろう。

【主要参考文献】

木倉豊信　「東大寺墾田地を主としたる呉西地区の古代地理（上）」『富山教育』280　1936他

金田章裕　『古代荘園図と景観』東京大学出版会　1998他

高岡市教育委員会　『高岡市遺跡地図』2000

田嶋明人　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター　1986

富山考古学会　『富山平野の出現期古墳』1999他

能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

『石川県能都町　真脇遺跡　—農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書—』1986

平安学園考古学クラブ（顧問　田辺昭三）　『陶邑古窯址群Ⅰ』1966

報告書抄録

ふりがな	いかりぬまたいせき　ちょうさがいほう
書名	五十里沼田遺跡　調査概報
副書名	平成15年度　能越自動車道の建設にともなう発掘調査
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第61冊
編集者名	根津　明義
編集機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-8601　富山県高岡市広小路7番50号　TEL 0766-20-1463
発行年月日	西暦2005年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五十里沼田遺跡（能越道地区）	高岡市五十里地内	16002	202239	36°46′35″	136°59′00″	20030521～20030804	945m²	道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
五十里沼田遺跡（能越道地区）	散布地	古墳時代前期～後期 古代	土坑，溝状遺構，畝状遺構群，溜池状遺構	古墳土師器，古墳須恵器 古代土師器　古代須恵器

高岡市埋蔵文化財調査概報　第61冊

五十里沼田遺跡　調査概報

――平成15年度　能越自動車道の建設工事にともなう発掘調査――

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2005年3月31日

印刷所　株式会社チューエツ高岡営業所

富山県高岡市京田498番地

写　真　図　版

図版101．調査区全景（垂直写真）

図版 201．調査区全景（北北東より）

図版 202．調査区全景（北東より）

図版 203．畝状遺構ＳＸ01（西部）

図版 204．畝状遺構ＳＸ02（西部）

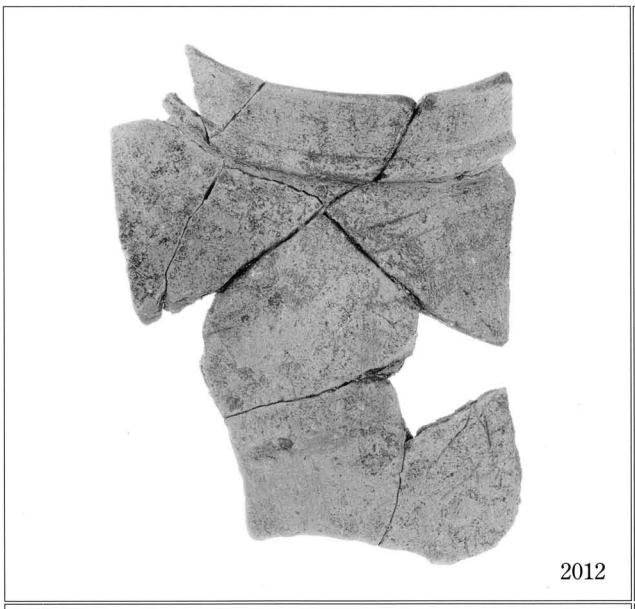
図版 205. 溜池状遺構ＳＺ01（北東方向より）

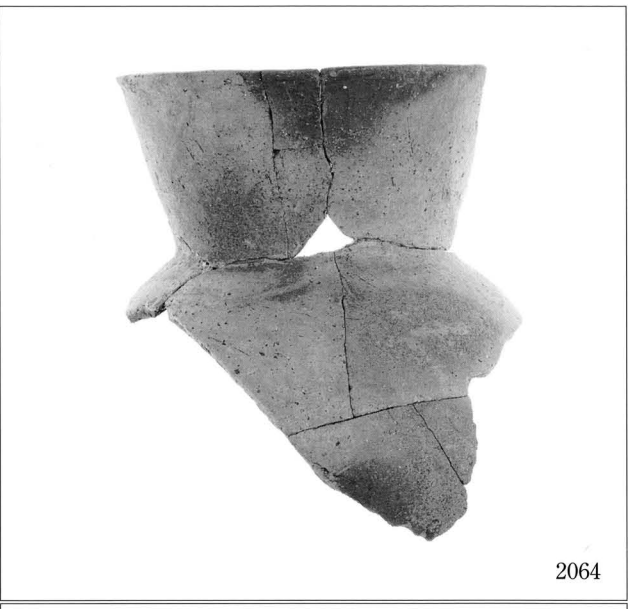
図版 206. 溜池状遺構ＳＺ01（北西方向より）

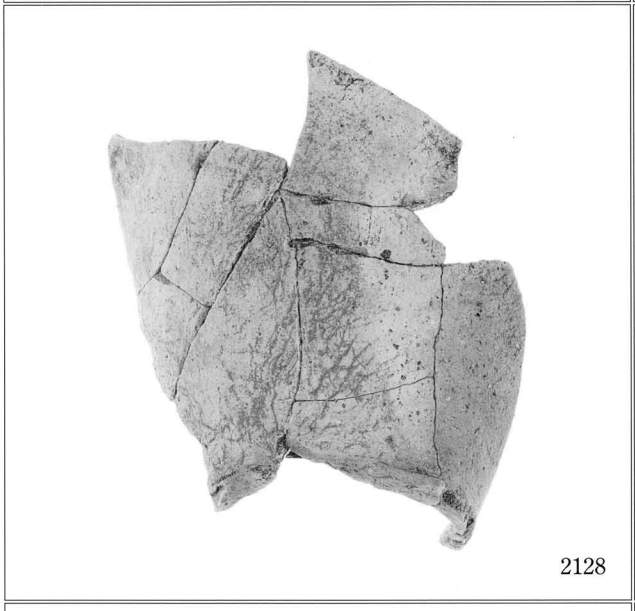
図版 207．遺物集積遺構ＳＸ03・遺物出土状況

図版 208．遺物集積遺構ＳＸ04・遺物出土状況

図版三〇一　調査風景


2012


2064

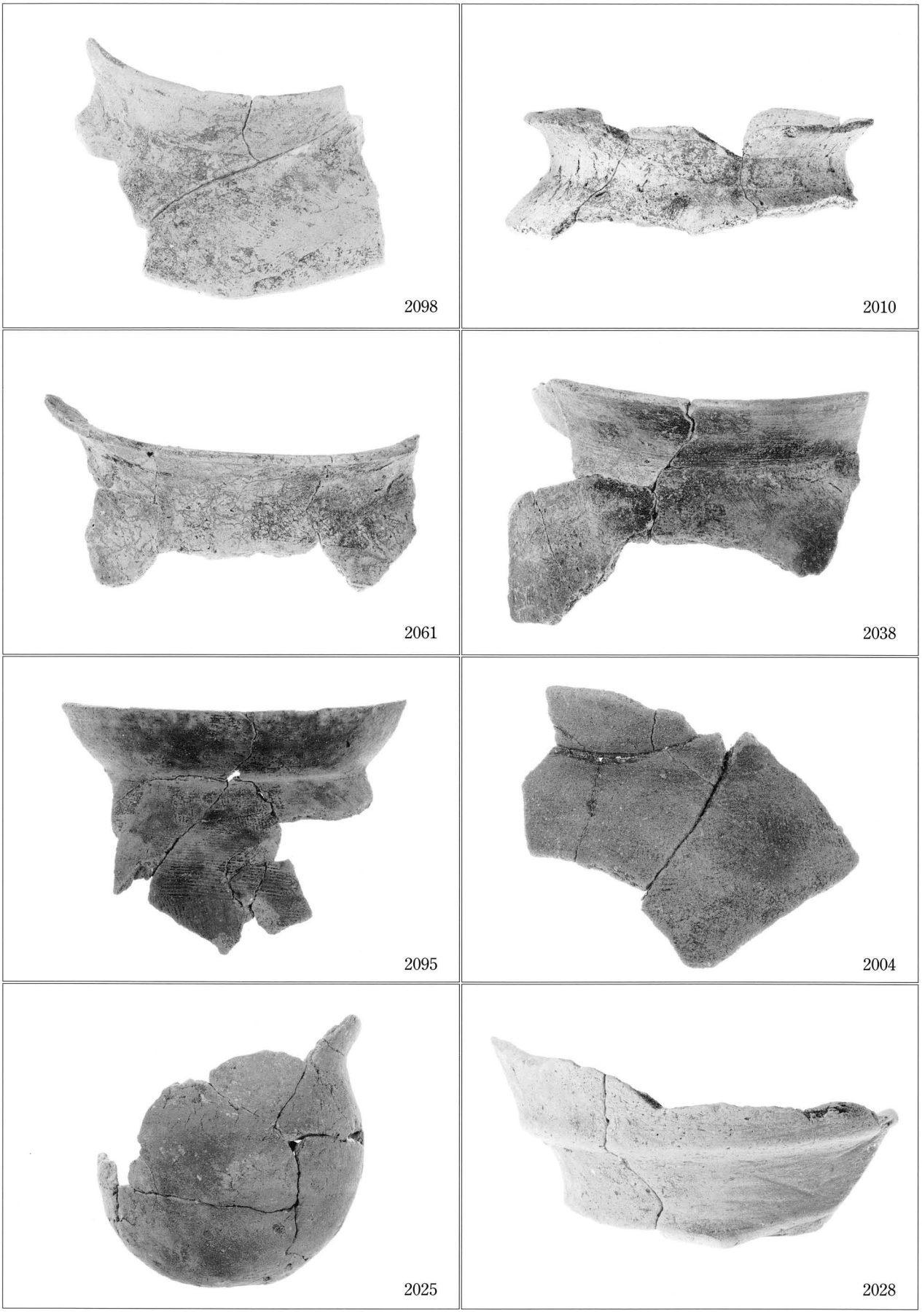

2128

2031

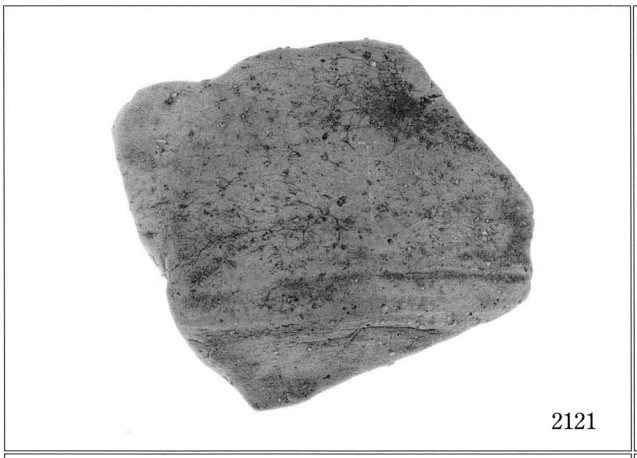
2032

2103

図版 401．土師器　壷・高杯（古墳時代前期～後期）



図版 402. 土師器　甕・壷（古墳時代前期～後期）


2121

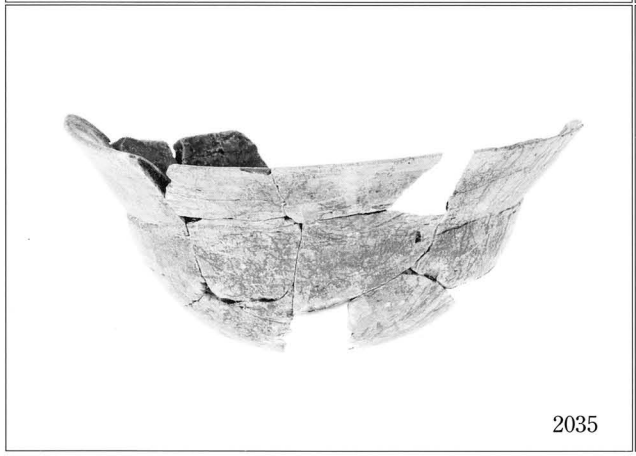
2067

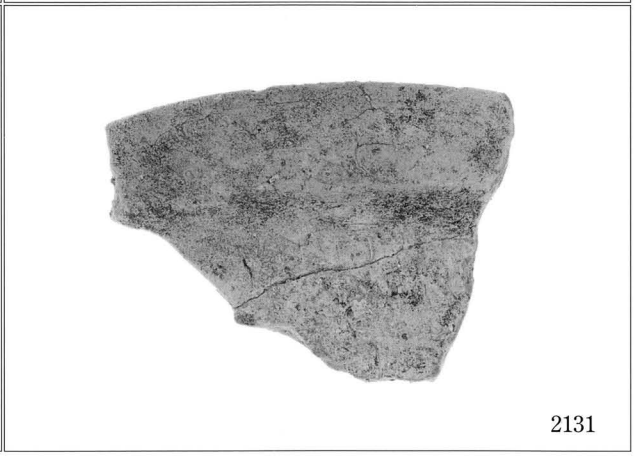
2096

2068

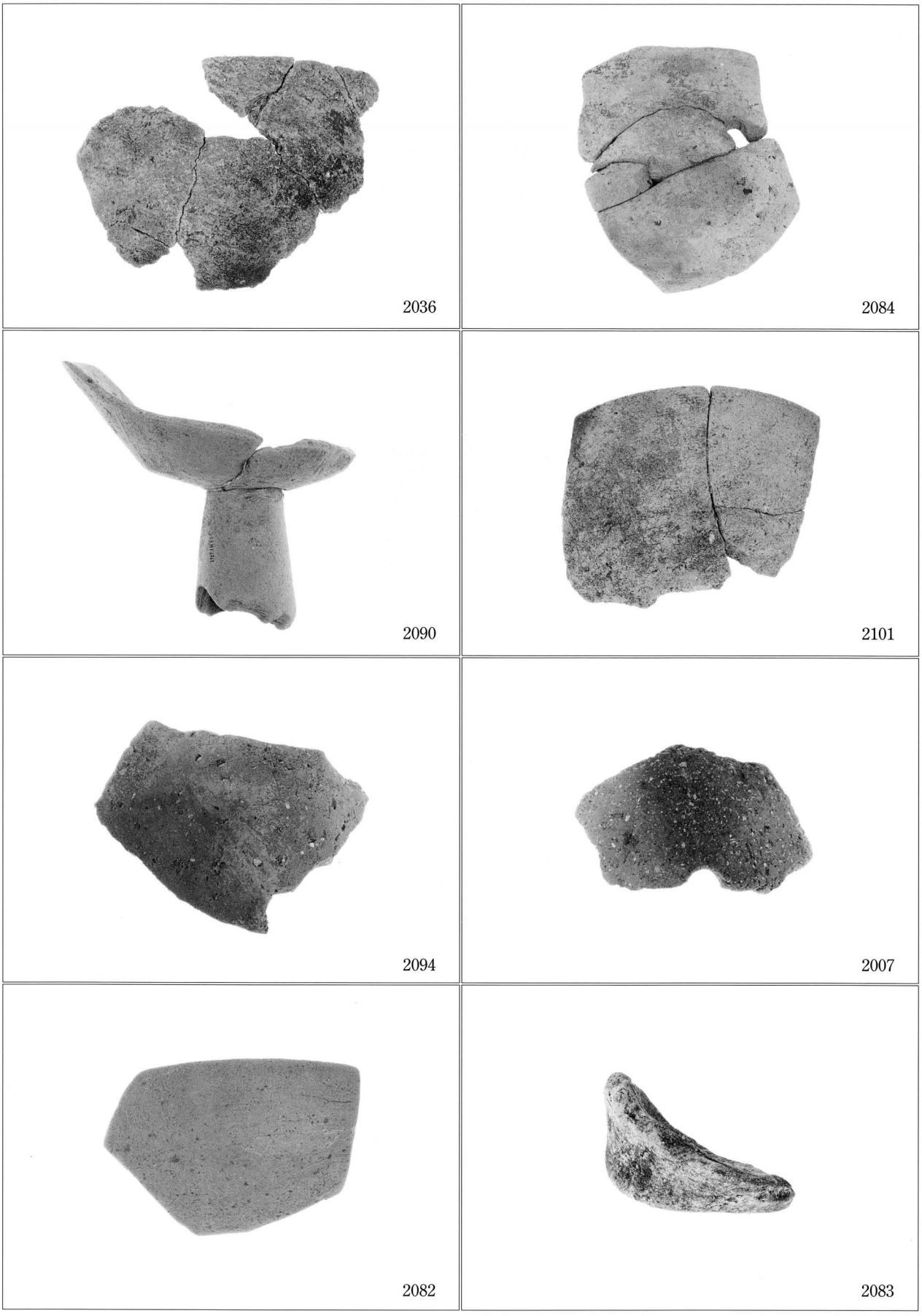
2043

2030

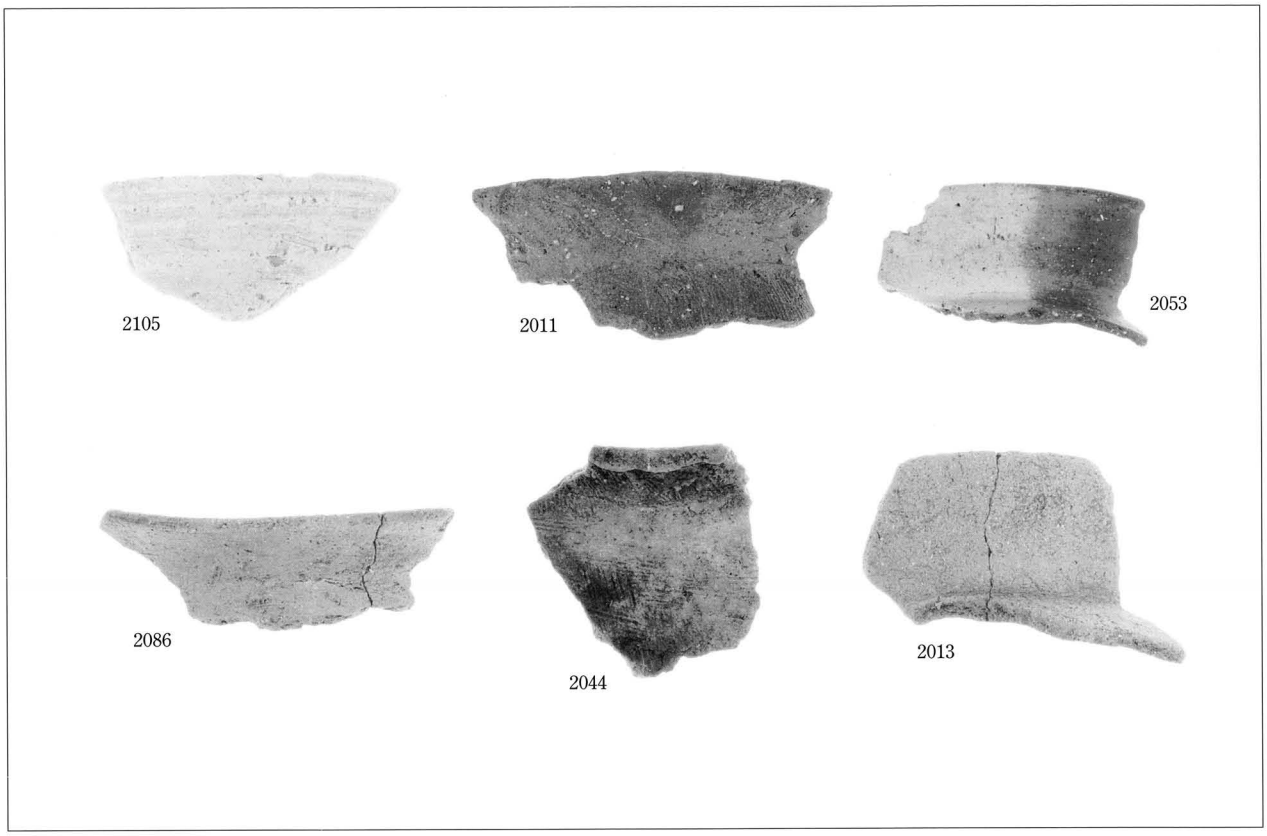

2035


2131

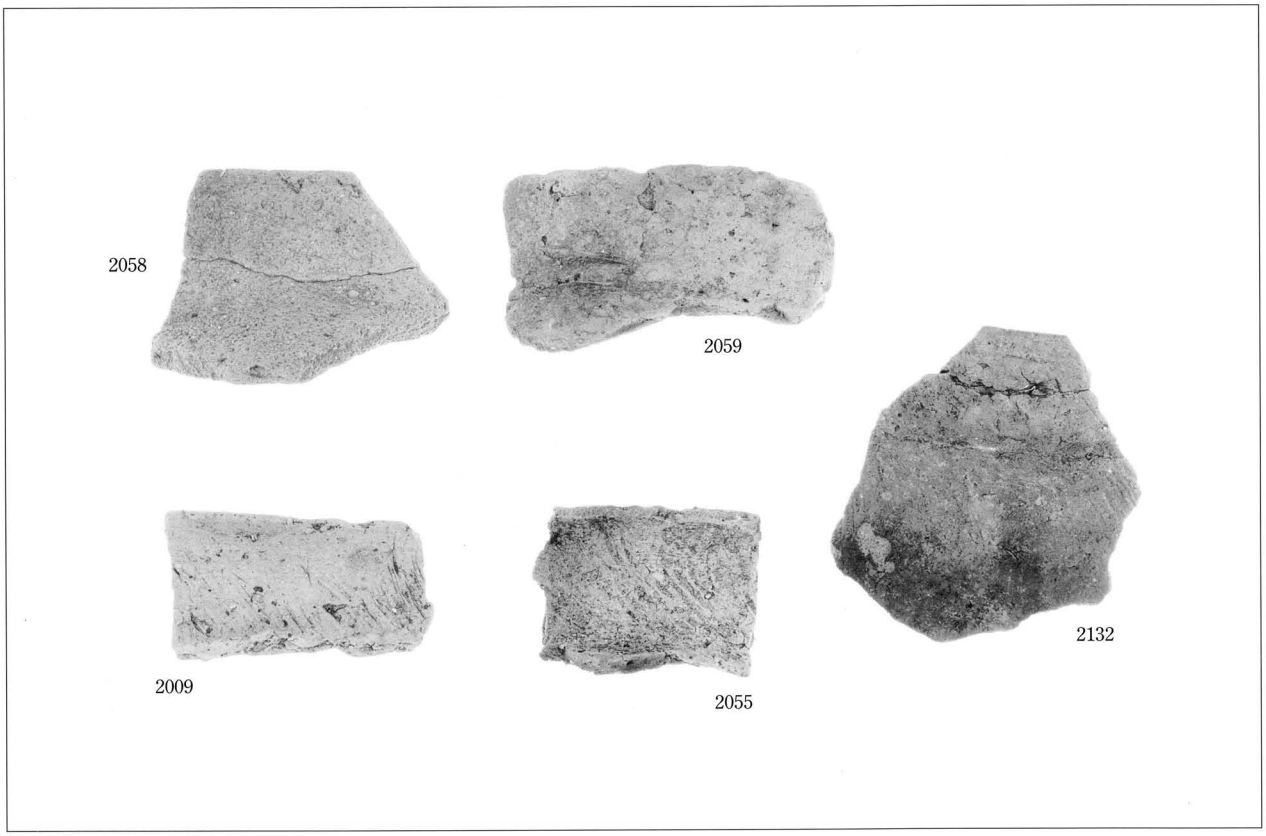
図版 403. 土師器　壺・小型丸底土器・鉢（古墳時代前期～後期）



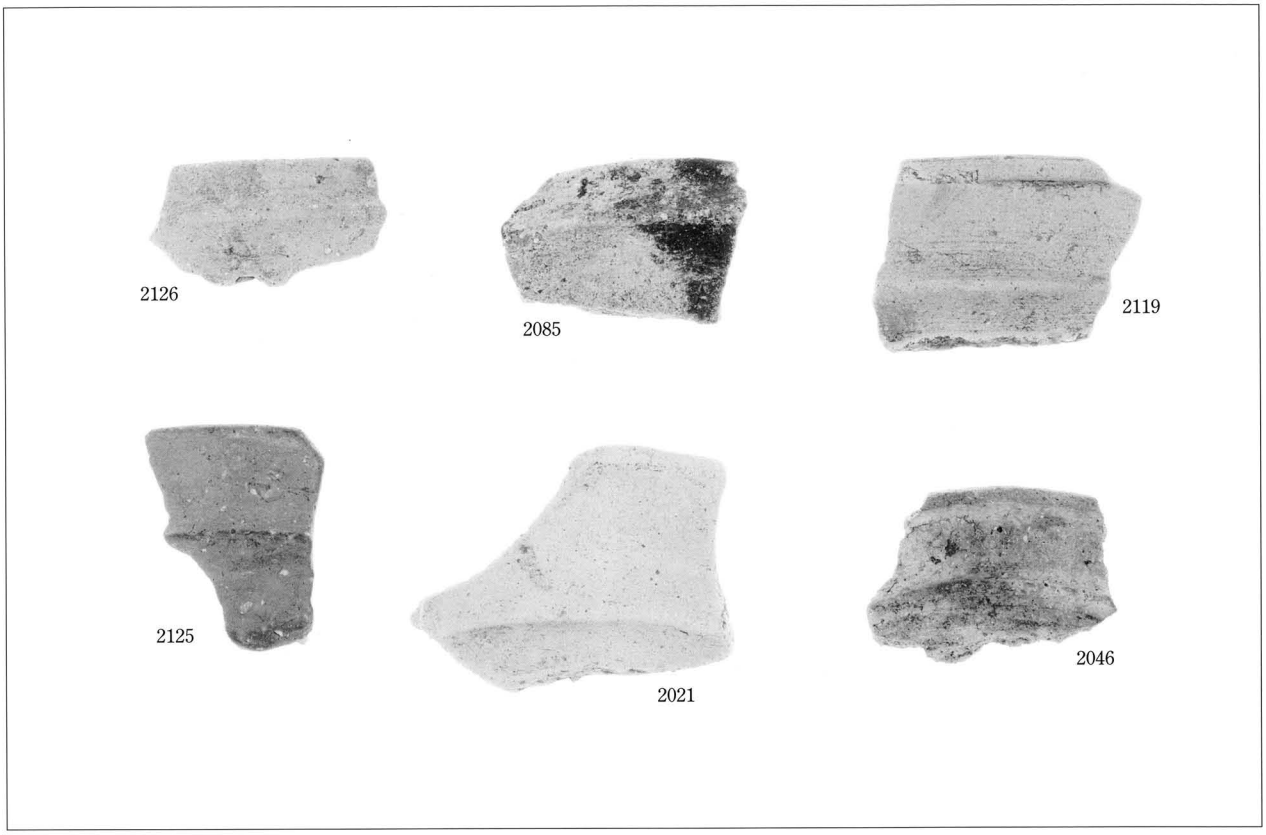
図版 404. 土師器　鉢・高杯・甑・椀・ミニチュア土器（古墳時代前期～後期）



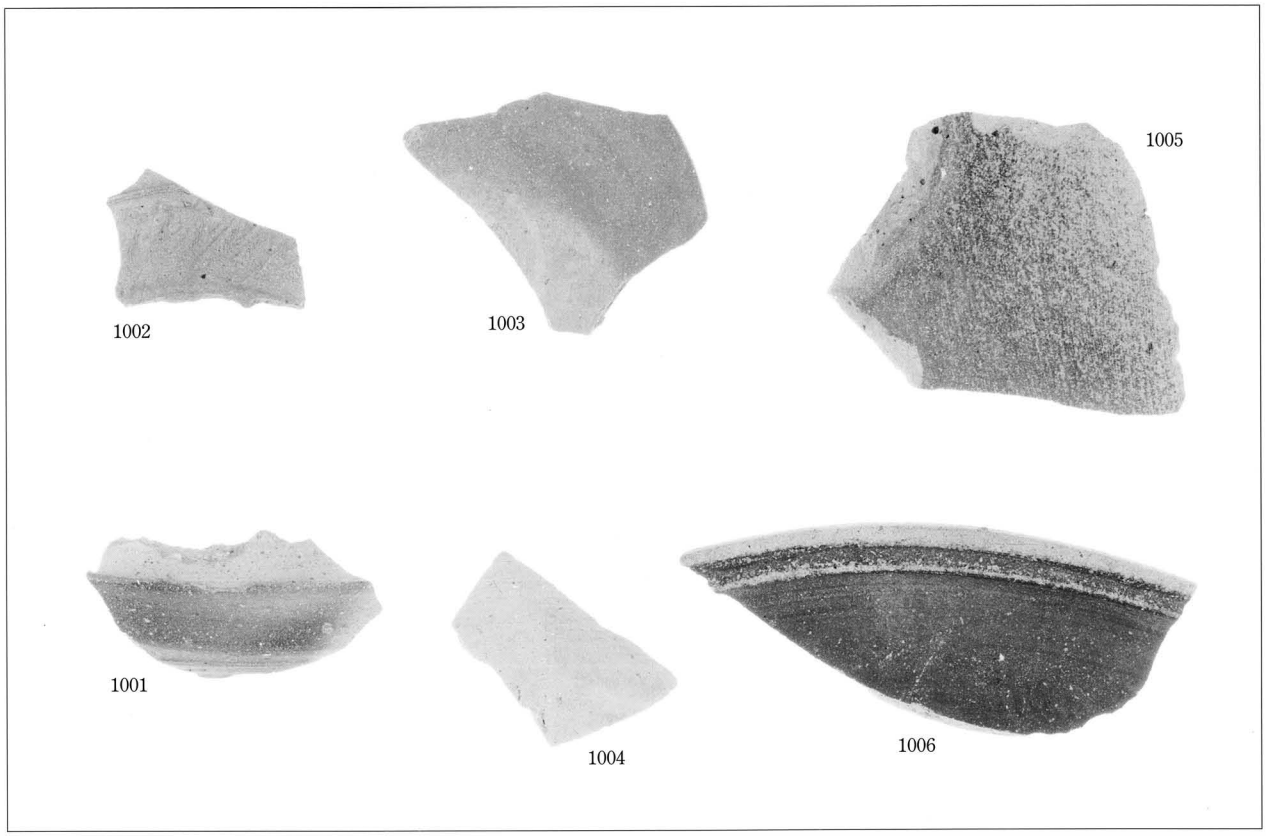
図版 405．土師器　甕（古墳時代前半期）



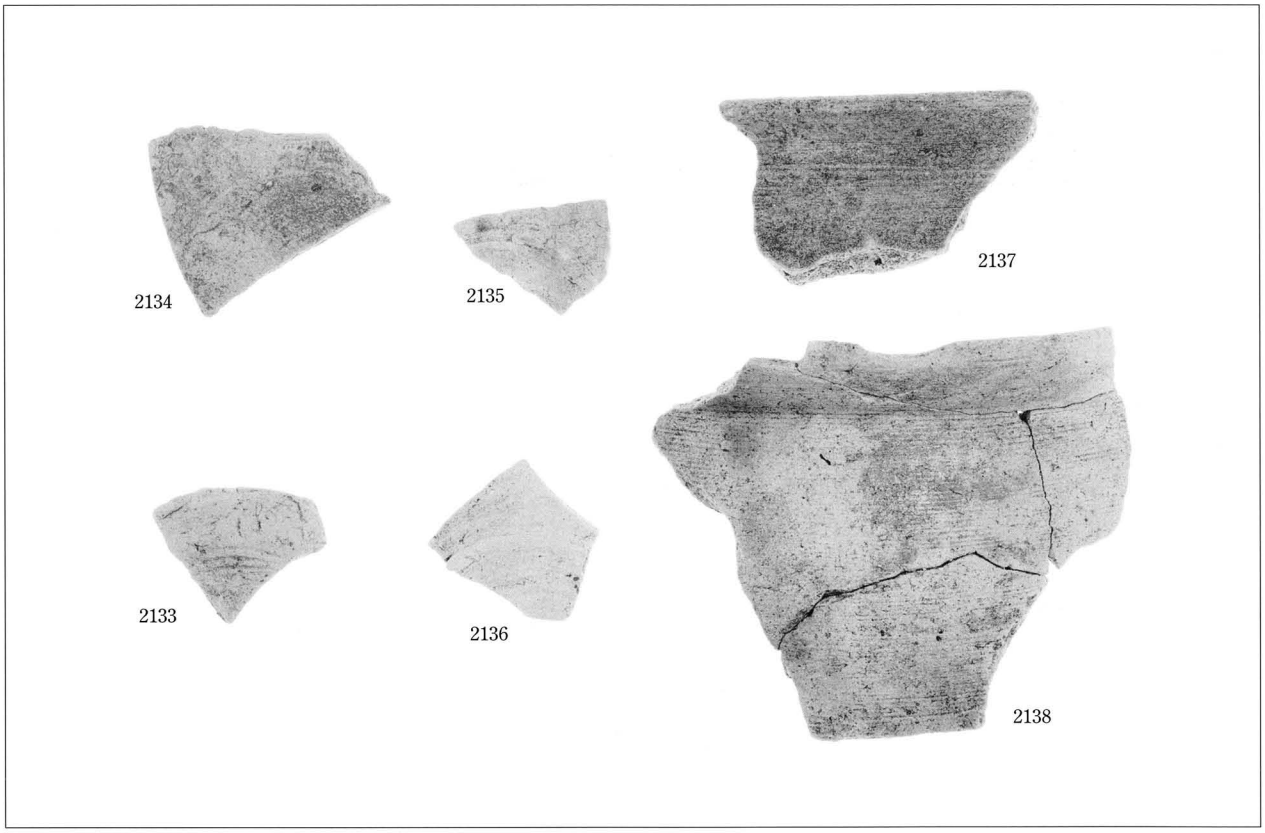
図版 406．土師器　甕（古墳時代中頃）



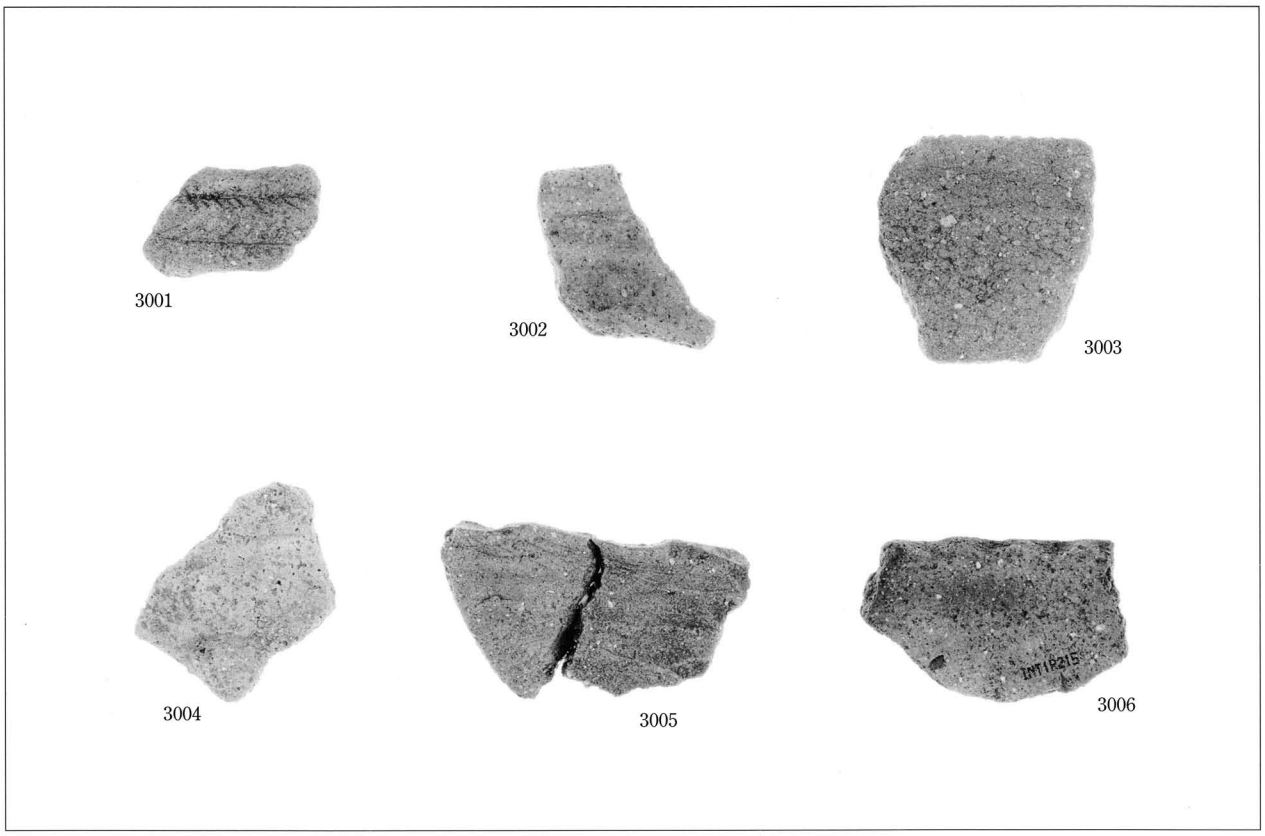
図版 407．土師器　壷（古墳時代前半期）



図版 408．須恵器　瑞・杯身・蓋・杯・横瓶・大甕（古墳時代中頃～古代）



図版 409. 土師器　杯・甕（古代）



図版 410. 縄文土器（縄文中期中葉～後期中頃）